

三木市所在

窟屋1号墳

(主) 平野三木線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告書



2009(平成21)年3月

兵庫県教育委員会

三木市所在

窟屋1号墳

(主) 平野三木線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告書

2009(平成21)年3月

兵庫県教育委員会



調査地遠景（東から）



窟屋 1 号墳全景（南西から）



窟屋 1号墳全景



石室全景



遺物出土状況



移築された窟屋 1号墳



M 1

单鳳環頭大刀柄頭



古墳出土土器



M 3



M 2



鞘飾金具



M 48



貝製飾金具
M 47



M 56



M 55



M 57



M 58

耳環



器台付着赤色顔料



M 51

M 50



M 54



M 53



M 52

鉄釘

例　　言

1. 本書は、三木市志染町窟屋に所在する窟屋1号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(主)平野三木線緊急道路整備事業に先立つもので、兵庫県東播磨県民局社土木事務所(三木土木事務所)の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成12年度に分布調査・確認調査、平成13・14年度に本発掘調査を実施した。なお、平成13年度本発掘調査については(株)岡田建設、空中写真測量については(株)イビソクに作業委託を行った。
3. 整理作業は、平成18~20年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(平成18年度)・兵庫県立考古博物館(平成19・20年度)が実施した。なお、遺物写真については(株)タニグチフォトに委託した。
4. 測量は国土座標第V系(日本測地系)を基準に実施した。
5. 標高は東京湾平均海水準を基準とした。
6. 本書の編集は池田征弘が行い、執筆は大平茂、篠宮正、池田征弘、岡本一秀、上田健太郎が行った。
7. 本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県立考古博物館に保管する。
8. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。
穴沢咏光、小網豊、高妻洋成、千葉豊、中久保辰夫、新納泉、畠中剛、日高慎、深沢敦仁、松村正和、脇谷草一郎

目 次

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	（池田）	1
第2節 調査の経過	（池田）	1
第3節 整理作業の経過	（池田）	3

第2章 位置と環境	（池田）	4
-----------	------	---

第3章 調査の成果

第1節 概要	（大平）	9
第2節 造構	（大平）	
1 墳丘		9
2 墓葬施設		19
第3節 遺物		
1 古墳時代の遺物	（池田）	
土器		25
金属製品		32
2 中世以降の遺物	（池田）	40
3 楠文・弥生時代の遺物		
楠文土器・弥生土器	（篠宮）	41
石器	（上田）	45

第4章 自然科学的分析

第1節 金銅製單鳳環頭大刀柄頭の分析	（岡本・池田）	47
第2節 須恵器器台に付着した赤色顔料の分析	（岡本・池田）	47

第5章 まとめ

第1節 古墳時期と周辺の古墳	（池田）	51
第2節 金銅製單鳳環頭大刀について	（池田）	53
第3節 馬具について	（池田）	56
第4節 鉄釘について	（池田）	57
第5節 「オケ・ヲケ伝承」と窟屋1号墳	（池田）	58

卷頭図版目次

卷頭図版 1

- 1 調査地遠景（東から）
- 2 窟屋 1号墳全景（南西から）

卷頭図版 2

- 1 窟屋 1号墳全景
- 2 石室全景

卷頭図版 3

- 1 遺物出土状況
- 2 移築された窓屋 1号墳

卷頭図版 4

- 1 単鳳環頭大刀柄頭
- 2 古墳出土土器

卷頭図版 5

- 1 鞘飾金具
- 2 耳環
- 3 貝製飾金具
- 4 器台付着赤色顔料
- 5 鉄釘

挿図目次

第1図 調査地位置	1	第26図 金銅装環頭大刀	33
第2図 調査位置図	2	第27図 鉄刀	34
第3図 周辺遺跡分布図	5	第28図 鉄鎌 1	35
第4図 明治期の窓屋 1号墳周辺	5	第29図 鉄鎌 2	36
第5図 調査地周辺地形図（圃場整備後）	7	第30図 馬具 1	37
第6図 調査地周辺地形図（圃場整備前）	8	第31図 馬具 2	38
第7図 どっこいさん	9	第32図 鉄釘・耳環・その他	39
第8図 調査前全体図	10	第33図 中世以降の遺物	40
第9図 調査後全体図	11	第34図 繩文土器 1	42
第10図 窓屋 1号墳断面図	12	第35図 繩文土器 2・弥生土器	43
第11図 窓屋 1号墳平面図	13	第36図 石器 1	44
第12図 墳丘・石室埋土断面図	15	第37図 石器 2	45
第13図 石室平面図	16	第38図 環頭大刀柄頭X線写真	47
第14図 石室床面平面図・側面図	17	第39図 環頭大刀柄頭の蛍光X線定性分析スペク	
第15図 上層遺物出土位置図・立面図	20	トル	48
第16図 須恵器蓋杯I群出土位置図	21	第40図 須恵器付着赤色顔料のラマンスペクトル	
第17図 須恵器蓋杯II群・土師器出土位置図	22	49
第18図 須恵器その他出土位置図	23	第41図 須恵器付着赤色顔料の蛍光X線定性分析	
第19図 金属製品出土位置図	24	スペクトル	50
第20図 環頭大刀柄頭出土位置図	25	第42図 志染周辺の横穴式石室	52
第21図 須恵器蓋杯I群	27	第43図 含玉单鳳環頭大刀柄頭の類別	54
第22図 須恵器蓋杯II群・高杯	28	第44図 環部文様の比較	55
第23図 須恵器壺類	29	第45図 貝製飾金具の分布	57
第24図 須恵器器台・甕	30	第46図 釘X類の分布	58
第25図 土師器高杯	32	第47図 窓屋 1号墳とその周辺	61

表 目 次

第1表 調査一覧	1	第3表 摂磨の鉄釘出土古墳	59
第2表 周辺遺跡分布図地名表	4		

付表

付表1 遺物一覧表	64
-----------------	----

写真図版

写真図版1 調査地遠景（東から）	玄室右側奥遺物出土状況
調査地遠景（北から）	玄室左側奥遺物出土状況
写真図版2 調査地遠景（東から）	玄室右側前遺物出土状況
調査地全景（南西から）	玄室左側前遺物出土状況
写真図版3 窟屋1号墳調査前（南から）	浜道遺物出土状況
窟屋1号墳調査前（東から）	環頭大刀柄頭出土状況
写真図版4 窟屋1号墳全景（南西から）	写真図版11 須恵器1 杯蓋
窟屋1号墳全景（北東から）	写真図版12 須恵器2 杯身
写真図版5 周溝（南から）	写真図版13 須恵器3 杯蓋・杯身
埴丘断面（南西から）	写真図版14 須恵器4 有蓋高杯
写真図版6 石室全景（北東から）	写真図版15 須恵器5 無蓋高杯・提瓶
石室基底石（北東から）	写真図版16 須恵器6 提瓶・壺
石室掘方（北東から）	写真図版17 須恵器7 壺・器台
写真図版7 石室内（南西から）	写真図版18 須恵器8 壺・土師器・陶磁器
石室右側壁（南から）	写真図版19 金属製品1 環頭大刀柄頭・鞘飾金具
石室左側壁（南西から）	
写真図版8 右壁玄門立柱石（南東から）	写真図版20 金属製品2 大刀・刀了
左壁玄門立柱石（北西から）	写真図版21 金属製品3 鉄鎌
玄室左壁部分（北西から）	写真図版22 金属製品4 鉄鎌・馬具
石室奥壁（南西から）	写真図版23 金属製品5 馬具
玄室床面（北東から）	写真図版24 金属製品6 鉄釘・耳環など
写真図版9 玄室遺物出土状況（北東から）	写真図版25 繩文土器1
玄室遺物出土状況（南西から）	写真図版26 繩文土器2
写真図版10 玄室右側奥遺物出土状況	写真図版27 石器
玄室左側奥遺物出土状況	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

兵庫県では、阪神・淡路大震災を教訓に、広域防災拠点を県下各地に整備し、その広域防災拠点ネットワークの中核として、三木市志染町の丘陵部において県立三木総合防災公園が設置されることとなった。そのため、防災公園へのアクセス道路の整備が必要となり、主要地方道県道平野三木線の志染交差点から三木防災公園までの区間にについて路線の拡幅及び付け替えが計画された。

そこで、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所ではこの計画を受けて、兵庫県社土木事務所（三木土木事務所）より依頼を受け、平成12年度～平成14年度に分布調査・確認調査・本発掘調査を実施した。



第1図 窟屋1号墳の位置

第2節 調査の経過

1 分布調査

平成12年8月に道路拡幅予定地を中心とした約130m²について分布調査（遺跡調査番号2000236）を実施した。その結果、既に『三木市遺跡地図』に記載されている窟屋1号墳が存在していることを確認した。

2 確認調査

平成13年1月に確認調査（遺跡調査番号2000368）を実施した。古墳と考えられる土盛りの北側と東側にトレンチを設定した。調査の結果、石室と考えられる石材が確認された。

3 本発掘調査

本発掘調査は平成13年度と平成14年度の2回に分けて行った（第8図）。

第1表 調査一覧

遺跡調査番号	調査の種別	調査担当者	調査期間	調査面積
2000236	分布調査	山田清朝	平成12年8月28日	130m ²
2000368	確認調査	山田清朝	平成13年1月23日・24日	24m ²
2001067	本発掘調査	大平茂・池田征弘	平成13年10月5日～12月14日	343m ²
2002136	本発掘調査	大平茂・様宮正・上田健太郎	平成14年9月30日～10月17日	300m ²



第2図 調査位置図

平成13年度の本発掘調査（遺跡調査番号2001067）は窟隣1号墳が所在する地区有地を対象に調査区を設定した。耕作地に隣接していることから墳丘は流失し、石室の残存状態は良くないと想定していたが、予想以上に石室の残存状態は良好であった。地元の要望もあり、遺構の保存を検討したが、路線の確保が難しいことから、石室の移築を行うこととなった。そこで、平成13年度の調査においては墳丘の除去・石室の解体はおこなわず、石室内を埋め戻して、調査を終了した。検出された遺構については写真的撮影（航空写真を含む）、実測図（空中写真測量）の作成などを行った。

調査期間中には自由が丘中学・三木中学・緑が丘中学トライやる見学（11月15日・16日）、地元説明会（11月10日）、現地説明会（11月17日）、三木市ガイドボランティア見学（12月5日）、志染小学校見学（12月10日）などをを行い、多数の人々に見て頂くことができた。

平成14年度の調査（遺跡調査番号2002136）は社土木事務所（三木土木事務所）が実施する石室の移築工事と併行して行った。石室の解体とともに墳丘断面の調査を行い、石室除去後は掘方を検出した。また、調査区を東側に拡張し、周溝の東側の田地に延びる部分について調査をおこなった。墳丘の北側

についてもトレンチを設定して確認をおこなった。現在、石室は調査地の南約700mの県立三本防災公園内に移築されている（第2図）。

第3節 整理作業の経過

出土品整理作業は平成18～20年度に行った。調査で出土した遺物（281入りコンテナにして21箱・石器38点・金属器86点）について、当博物館にて接合・復元・実測・拓本・写真撮影などを行い、遺構図および遺物実測図についてトレース・レイアウトを行った。

作業は整理保存班藤田淳（平成18年度）、岸本一宏（平成19年度）、篠宮正（平成20年度）の補助のもとに学芸課大平茂、整理保存班篠宮正、調査第1班池田征弘、調査第2班上田健太郎が担当した。金属器の保存処理作業は整理保存班岡本一秀が担当した。写真撮影については（株）タニグチフォトに委託した。

また、上記の作業にあたっては下記嘱託員の協力を得た。

尾鷲 都美子 栗山 美奈 真子 ふさ恵 大前 篤子 早川 亜紀子 佐伯 純子
伊藤 ミネ子 家光 和子 藤井 光代 早川 有紀 萩野 麻衣 谷島 里奈
的場 美幸

第2章 位置と環境

三木市は兵庫県内播磨地域の東南部にあたり、旧播磨国美嚢郡の範囲には相当する。市域の西端には加古川が南北に流れ、支流の美嚢川が流れ込んでいる。三木市域はこの東西に流れる美嚢川とその支流の志染川などに沿って広がっている低地や段丘とその背後の丘陵地で構成されている。

三木市には加古川を通じた南北の交通、美嚢川や志染川などをたどる丹波や有馬方面との交通路があり、特に近年は山陽道・西国街道に対する裏街道としての湯ノ山街道の重要性が注目を集めている。

窟屋1号墳は志染川の流域に位置する志染町に位置している。志染町は東西に流れる志染川の南北に平地部が広がり、その南北には丘陵部が広がっている。平地部は段丘化し、志染川の南岸では、低位段丘面に集落遺跡が広がり、窟屋1号墳や窟屋扇ノ坂古墳より高い標高約75m以上の段丘面には中世まで遺跡はほとんど広がっていない。以下に志染町付近の遺跡を中心に時期ごとの遺跡の変遷について述べる。

旧石器時代

旧石器は周辺では出土していない。三木市内では和田白長大神社・与呂木宮ノ元遺跡（33）でナイフ形石器が出土している。

縄文時代

依然として明瞭な遺跡は見つかっておらず、戸田遺跡（20）や窟屋1号墳（1）の墳丘内に後期の土器や石器が含まれるのみである。

弥生時代

中期には老谷遺跡（19）で堅穴住居跡や吉田南遺跡（11）、井上道坂遺跡、井上中合遺跡で遺構が検出され、集落の存在が明瞭になってきている。

後期に細目有田遺跡（堅穴住居跡）（4）、小戸田遺跡（堅穴住居跡）（23）、御坂黒岩前遺跡、御坂遺跡（20）、戸田前田遺跡などの遺跡が見つかり、遺跡数の増加が認められる。また後期には吉田1号墓壙棺（9）、老谷遺跡墳丘墓・土器棺（18）など丘陵部での墳墓が見つかっている。

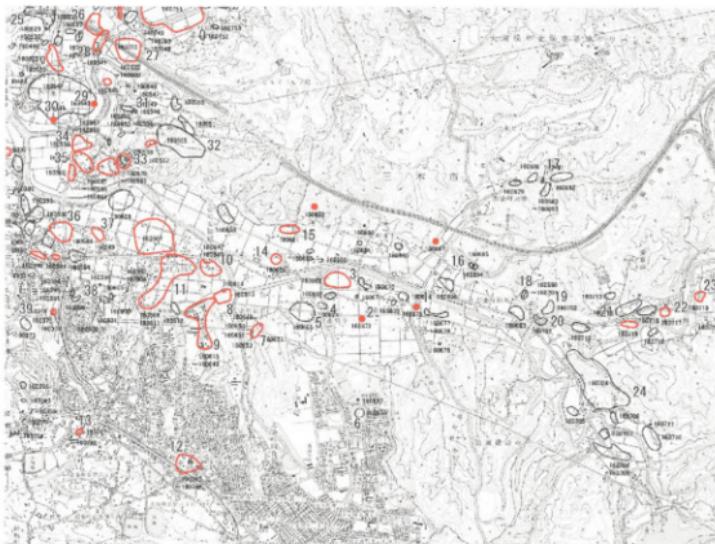
古墳時代

集落遺跡については吉田南遺跡第3地点（11）、東吉田遺跡第2地点（10）、志染中梨ノ木遺跡（14）、窟屋藤木遺跡（3）、戸田井ノ姿々遺跡（22）、小戸田遺跡（23）などで堅穴住居跡が検出されている。

前期の古墳については近隣では見つかっておらず、三木市内では下石野5号墳（愛宕山古墳）以外明瞭ではない。中期には前方後円墳である野々池7号墳（12）、武塚2号墳（13）などがあり、吉田住吉山古墳群（8）では方墳が見つかっている。後期になると吉田古墳群（9）を始めとして、吉田住吉山古墳群（8）、自由が丘古墳群、広野古墳群など本格直葬墳で構成される群集墳が多く見られ、横穴式

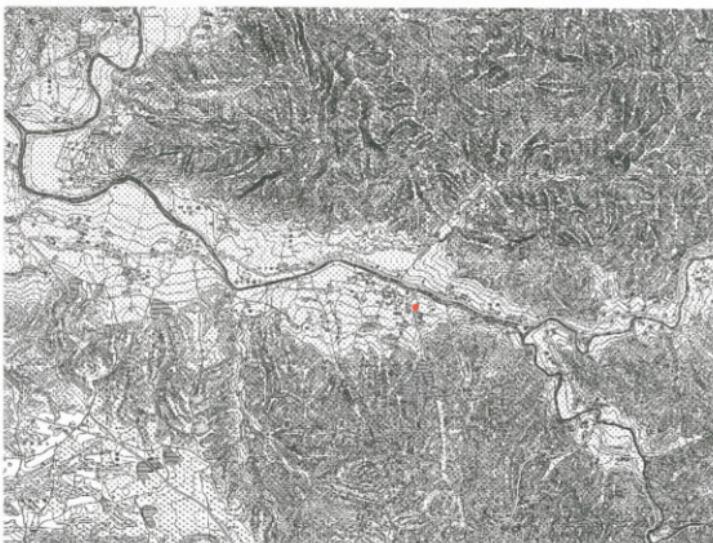
第2表 周辺遺跡分布図地名表

1 窟屋1号墳	10 東吉田遺跡	20 御坂遺跡	30 久留美丈ノ納古墳
2 窟屋扇ノ坂古墳	11 吉田南遺跡	21 戸田遺跡	31 平井當跡群
3 窟屋藤木遺跡	12 野々池古墳群	22 戸田井ノ姿々遺跡	32 平井山ノ上付城跡
4 細目有田遺跡	13 武塚古墳群	23 小戸田遺跡	33 与呂木青苔台古墳群
5 高男寺本丸遺跡	14 志染中梨ノ木遺跡	24 三津田城跡	34 与呂木河ノ元遺跡
6 高男寺庵寺	15 志染中谷遺跡	25 久留美南跡群	35 与呂木大堀遺跡
7 繩目古墳群	16 弘農遺跡	26 田井町遺跡	36 複原寺ノ下遺跡
8 吉田住吉山遺跡・吉田住吉山古墳群・和田村四合谷村ノ口付城跡	17 偕傳院	27 西ヶ原遺跡	37 宿原南ノ下遺跡
9 古谷古墳群	18 老谷頃塚墓群	28 大池古墳群	38 宿原當跡群
	19 老谷遺跡	29 久留美上野ノ下古墳	39 君ヶ峰城跡



第3図 周辺遺跡分布図 縮尺1/50000

赤色は古墳時代の道路



第4図 明治期の遺跡周辺 縮尺1/50000

石室墳は野々池3号墳（12）、窟屋1号墳（1）、窟屋扇ノ坂古墳（2）、細目古墳群（7）と少ない。古墳のはとんどが志染川の南側の丘陵部に設けられている。この時期には記紀や風土記によると「縮見屯倉」が置かれていたとされることも注目される。

奈良・平安時代

古代においては播磨国美嚢郡内の「志染里」、「志染郷」と呼ばれていた。また、式内社の御坂神社が存在していたと考えられる。

安福山城跡、志染中谷遺跡（15）、窟屋藤木遺跡（3）、戸田遺跡（21）などがみつかっている。このうち志染中谷遺跡からは墨書き器・漆塗器が出土しており、志染郷の中心的な遺跡と考えられている。

平安時代にはほぼ全域で開発が進む。また、丘陵部に存在する伽耶院（17）や高男寺廢寺（6）では経塚が見つかっている。

鎌倉・室町時代

この時期には昭慶門院領志染庄、天龍寺領志染保などが存在した。

平安時代に引き続き東吉田、窟屋、三津田、戸田などで集落遺跡が見つかっている。加えて、南北朝・室町時代には吉田住吉山遺跡（8）で城跡、高男寺本丸遺跡（5）で居館跡、高男寺廢寺跡（6）で寺院跡がみつかっている。吉田住吉山遺跡は南北朝時代の城跡としては規模が大きく、赤松氏による丹生山攻めの陣所の可能性が考えられている。

天正6年の三木城攻めに伴って、平井山ノ上付城跡をはじめとする付城跡が三木城を取り囲むように周辺の丘陵部で見つかっている。吉田住吉山遺跡（8）はそのうち「和田村四合谷村ノ口」付城と比定されている。

江戸時代以降

窟屋1号墳の所在する窟屋付近は江戸時代には池野村（風土記・日本書紀に見える池野宮の遺称地と考えられている。）と呼ばれ、姫路藩・明石藩領などを経てきた。明治9年に高男寺村と合併し、志染石室を由来として窟屋村と称している。（ちなみに上和田村と四合谷村は『日本書紀』にみえる「忍海部造細目」を由来として細目村を称している。）明治29年には周辺9ヶ村が合併して志染村の一部となり、昭和29年に三木市志染町に引き継がれている。

参考文献

三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財調査概報－昭和50年度～昭和59年度－』1986年

三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ－昭和60年度～平成6年度－』2000年

三木市教育委員会『三木市遺跡分布地図』2001年



第5図 調査地周辺地形図（圃場整備後） 縮尺1/5000



第5図 調査地周辺地形図（圃場整備後） 縮尺1/5000

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

窟屋1号墳は、三木市志染町窟屋（旧池野村）に所在する古墳である。三木市市街地から東へ約5km、加古川の支流志染川と窟屋川が合流する地点の南側、南東から並ぶ段丘上の縁辺に立地する。標高は77.00mを測る。段丘崖の高さは約2.5mで、西方向へは平野が広がり眺望も良いが、東は丹生山などの山並みが迫っている。また、南へは低い峠越えで明石川流域（押部谷）に出ることが可能である。

現在、段丘上は古墳が立地する一部を残し、周囲は水田化されている。調査対象地は、古墳が残った石仏（どっこいさん）のある窟屋地区有地とその東の水田の約300m²である。

現在、窟屋1号墳の近くに古墳は認められないが、1980年頃には地元の古老人の話で古墳が隣接地にもあり、土取りが行われた際に大刀などの鉄製品が出土したとされるため、今回調査の古墳を1号墳としている（なお、南隣接地については2次発掘調査に併せトレンチを入れたが、古墳の存在を示すようなものは確認出来なかった）。

調査の結果、古墳は長径約18m×短径16m前後の円墳で、横穴式石室を埋葬施設とすることが明らかとなった。石室などから金銅製單鳳環頭大刀柄頭をはじめとする多数の遺物が出土した。また、南側の平坦地では土坑状のものが幾つか検出されたが、遺物は出土せず、木の根や耕作に伴うものと思われる。



第7図 どっこいさん

第2節 遺構

1 墳丘（第8～12図）

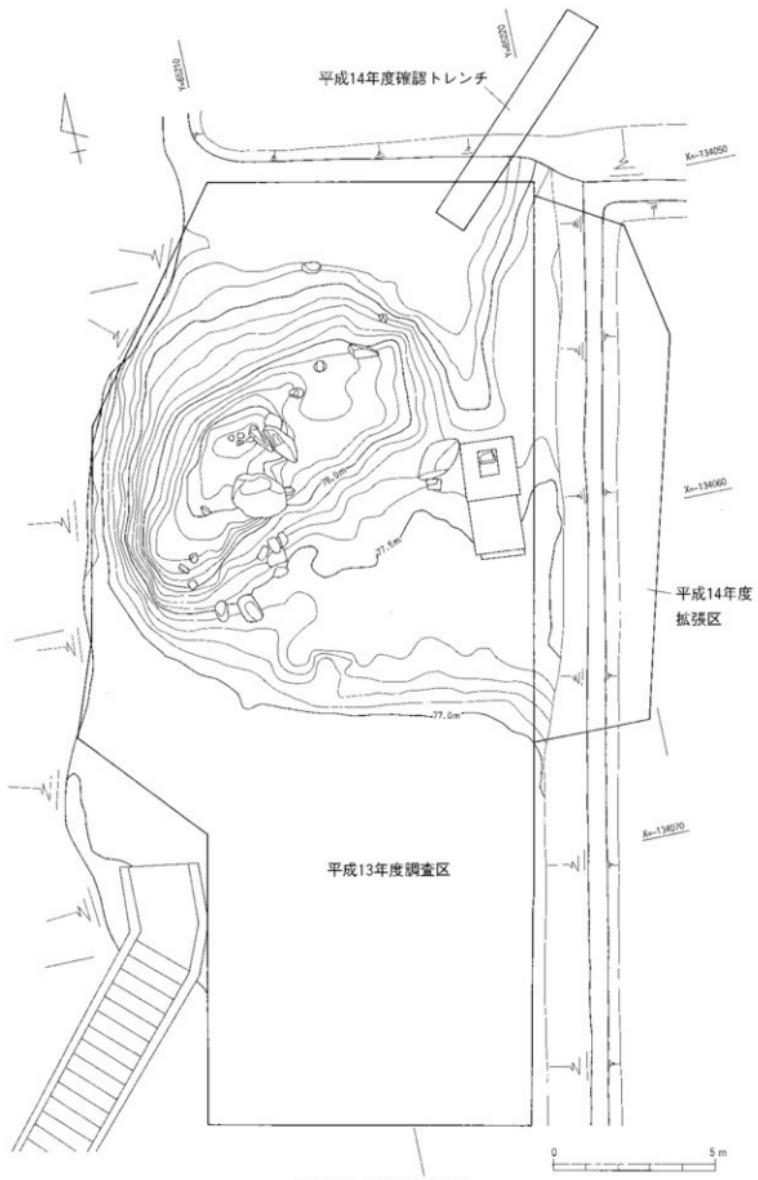
墳丘は第8図の調査前測量図に見るとおり大きく削り取られ、石室も天井石が取り除かれた状況で完全に埋もれていた。そして、墳丘の傍らには天井石を使用した地元で「どっこいさん」と呼ぶ宝暦五年銘のある地蔵を刻んだものや倒壁の一部が置かれていたから、江戸時代までに破壊されていたことは明白である。

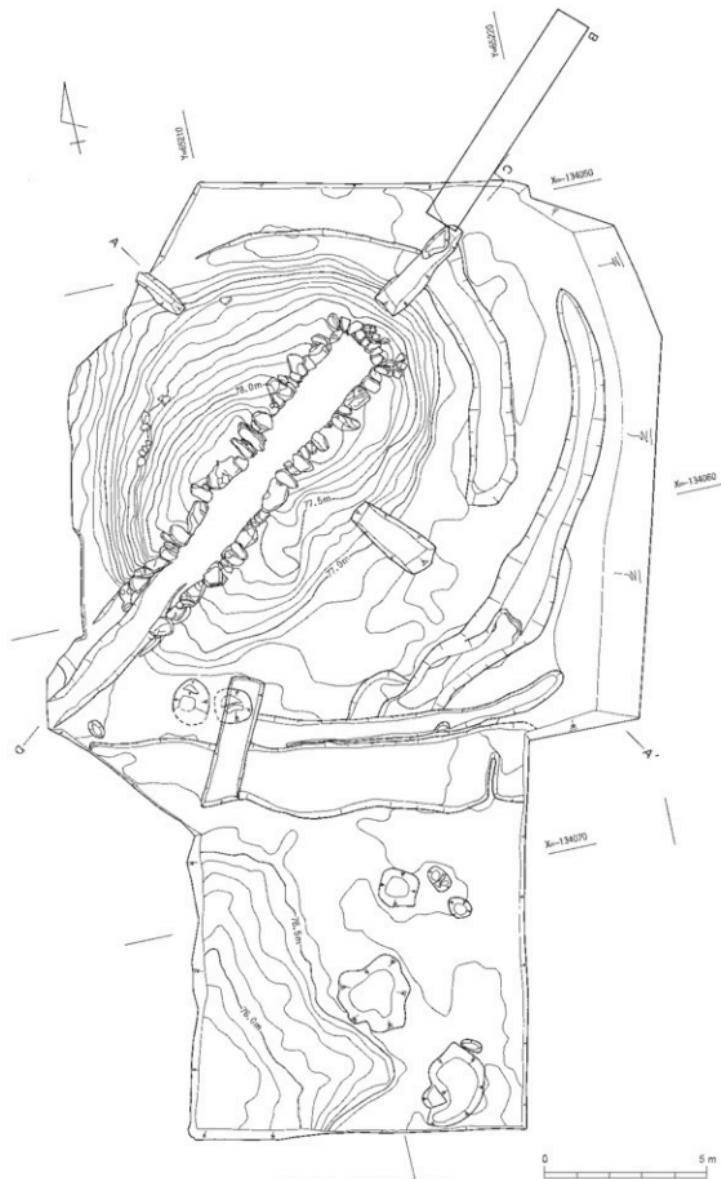
現状の墳丘は東西長約13m、南北幅約10mで、南側がほぼ直線的にえぐられた半楕円形、石室床面から高さ2.0m分が残存する。

本来の古墳の形態と規模は、どの程度のものなのであろうか。

墳丘規模の目安となる掘削溝には、確認調査で発見した幅1.5mの弧状溝がある。奥壁側にあり、約16mの長さで確認した。これで復元すると、直径13mの大きさの円墳になる。しかし、この大きさでは石室全体を覆う盛り土は積めないし、掘削溝は地形的にレベルの高い位置に造るのが通常のあり方である。そこで、この溝は墳丘上取時の掘削であろうと捉えた。

次に、その外2.0mで発見した三日月形の溝がある。地形的にレベルの高い方（東南側）にのみ弧状

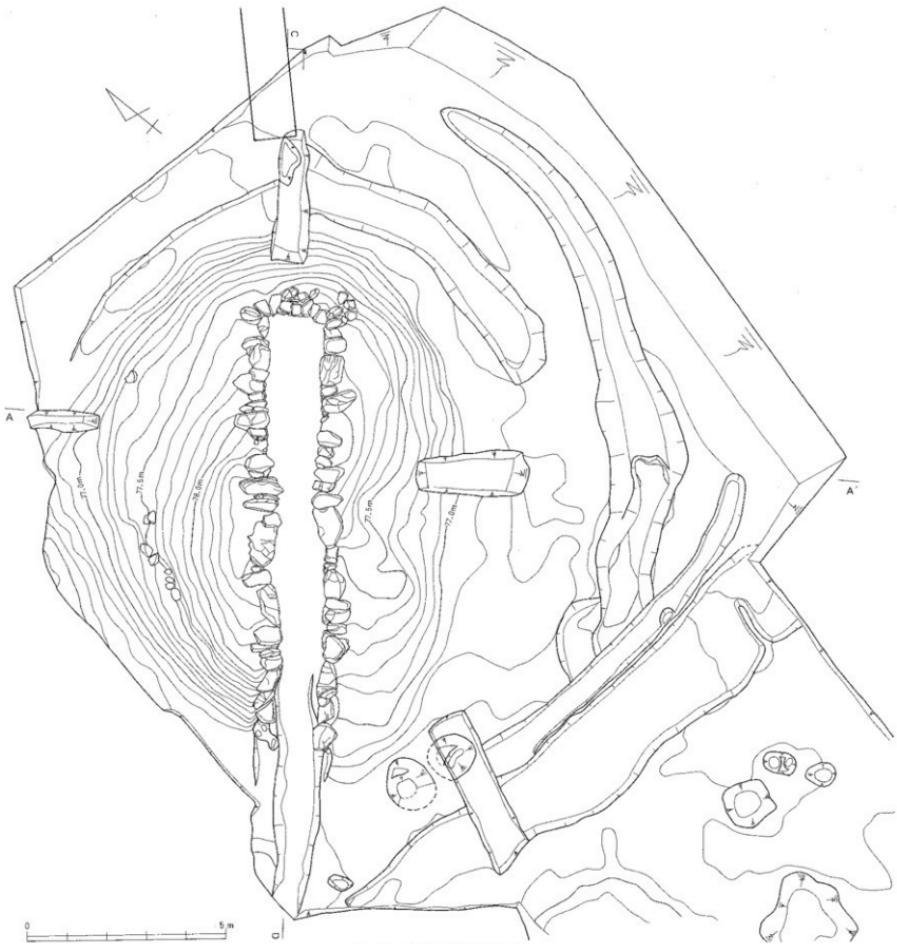




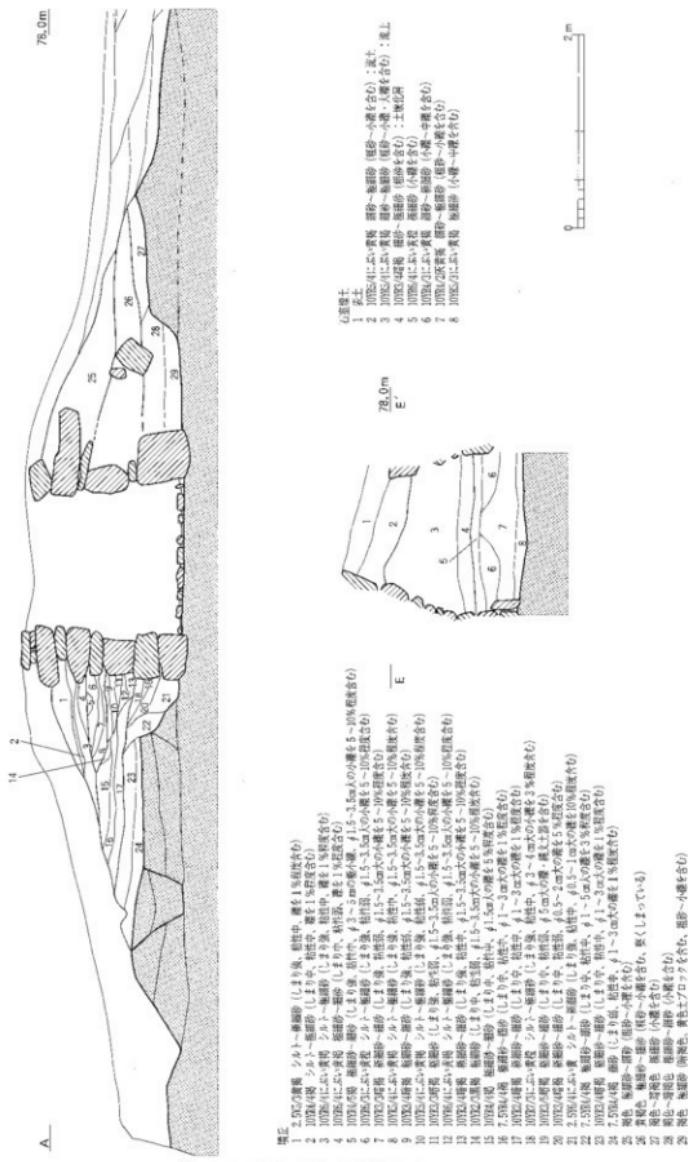
第9図 調査後全体図



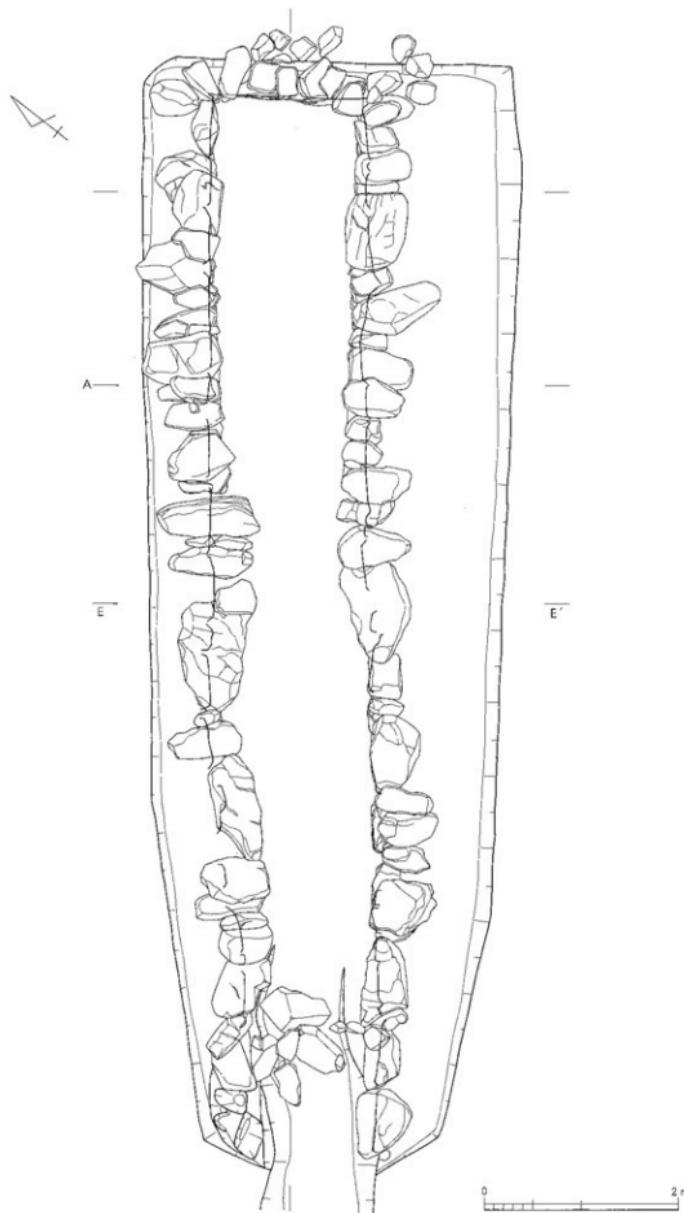
第10図 室屋1号壙断面図



第11図 窟屋 1号 墓平面図

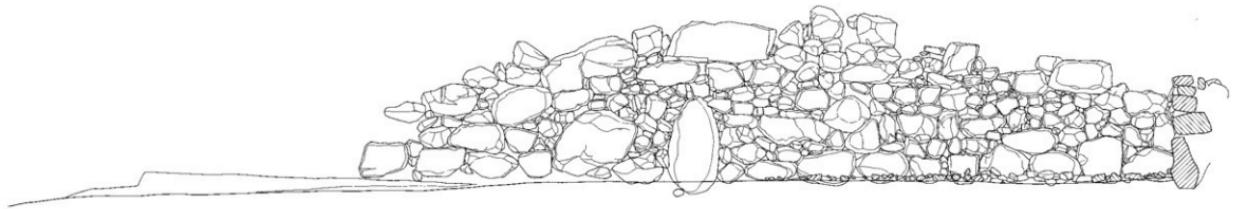


第12図 塹丘・石室埋土断面図

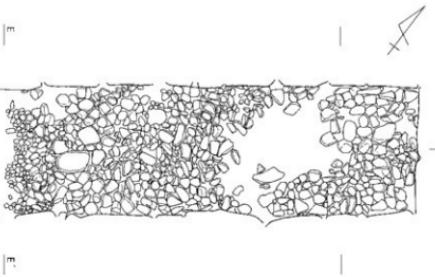
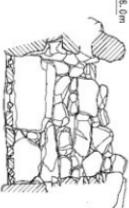


第13図 石室平面図

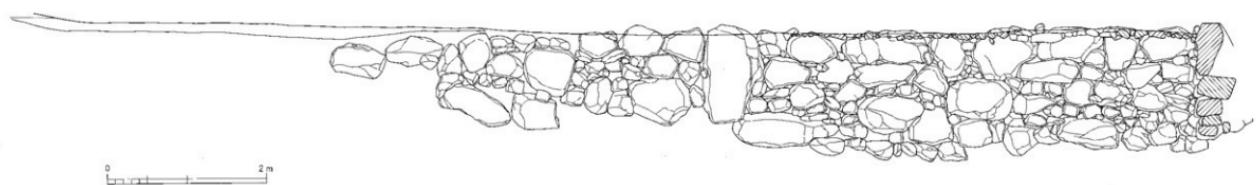
78.0m



78.0m



E



78.0m

第14図 石室床面平面図・側面図

に残っている。なお、この溝は調査区外に延びることが明らかで、調査中に地元から古墳保存の要望が出て移築することになったため、次年度の移設前に墳丘断ち割りと併せて2次調査を行っている。さらに、途切れた北側ではトレンチを設け、統かないことも確認した。最大幅は2.0m、長さは約15mを測る。深さ約5cm、断面U字形の浅い溝である。また、南端には一段深い落ち込みを伴っている。これを、古墳造成時のものと判断した。なお、墳丘の北西側は段丘崖となっており、道路造成時に一部が削り取られている。

こうした様相から判断すると、古墳の規模は長径約18m×短径16m前後の東北から南西に長い椭円形を呈する円墳となる。高さは2.5m以上あったであろう。また、断ち割りの結果から石室南側は一度地山面まで掘り下げ、石室北側は造成時の地表面を残して墓域（石室の掘り方、深さ約50cm）を設け、基礎石を置いた後、側壁の構築に伴ってこの上に黄褐色土や褐色土（盛り土）を交互に積み上げていることも明らかになった。特に、右側壁控え部分は強固に締めている。このように墳丘の大半は盛り土であり、山麓斜面に立地する古墳に比べると自然地形の利用が少ない。

さらに、旧表土下層には縄文土器・石器など縄文時代のものが含まれる包含層が存在し、特に古墳の南側は古墳造成に際してこの土を盛り土にも使用しているため、墳丘からもかなりの土器片・石器などが採集されている。そして、2次調査では盛り土と石室の除去後に墳丘下の遺構検査を行ったが、第12図の断ち割り部分に掛かった幅60cmの土坑と、石室入り口南東側で確認検査時に検出した土坑以外に遺構は発見出来なかった。断ち割り部の土坑からは、遺物が出土しなかったし、石室入り口横の二つの土坑からも遺物は認められなかった。ただし、石室横の土坑は埋土が縄文時代の土坑と異なり、古い時代のものとは考えられない。

その他、古墳に隣接する南側の平坦地でも数個の土坑を確認したが、これも遺物がなく木の根や耕作に伴うものと考えられる。

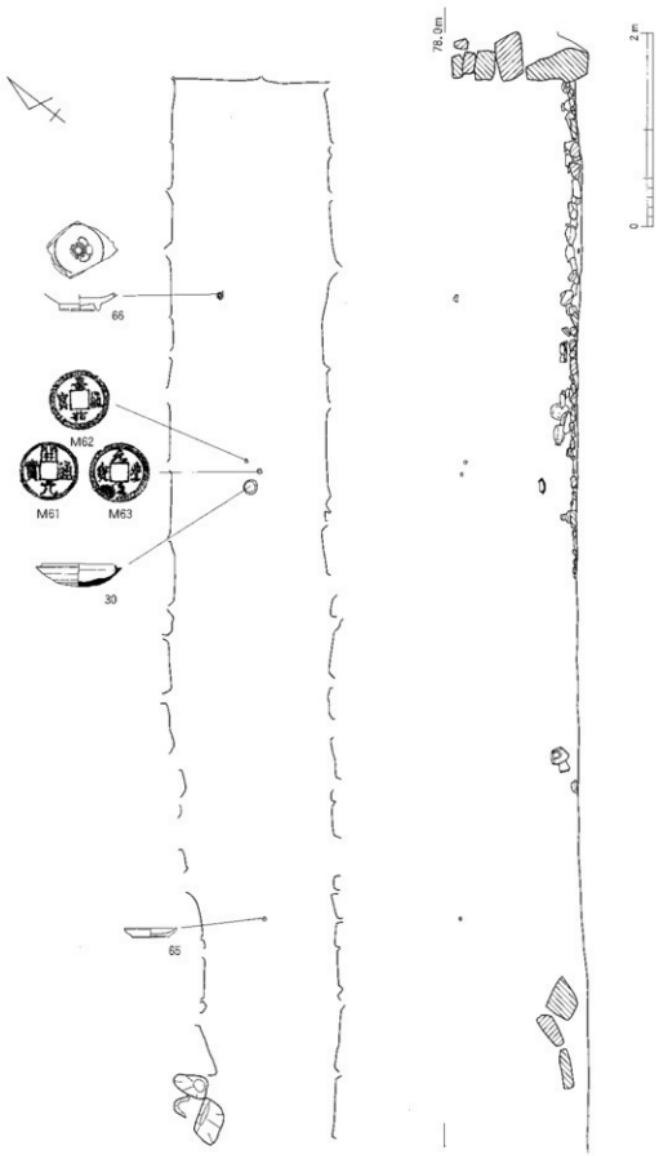
2 埋葬施設（第13・14図）

埋葬施設は、墳丘の中心にある横穴式石室である。石室の主軸はN52.5°Eをとり、南西方向に開口している。未発見ではあるが、生前の居住域の見える方向に開けたと考えられる。床面の平面形態は無袖式であり全長10.85m、玄室奥壁で幅1.60m、玄門で1.60m、羨門部幅1.20mを測る。三木市内では最長規模の横穴式石室である。ただし、長さに比較して、幅の狭い石室となっている。なお、第13図の石室の掘り方（4m×11.5m）を見ると、当初はもう一回り幅広く造るか、左片袖の石室を構築しようと考えていたようである。

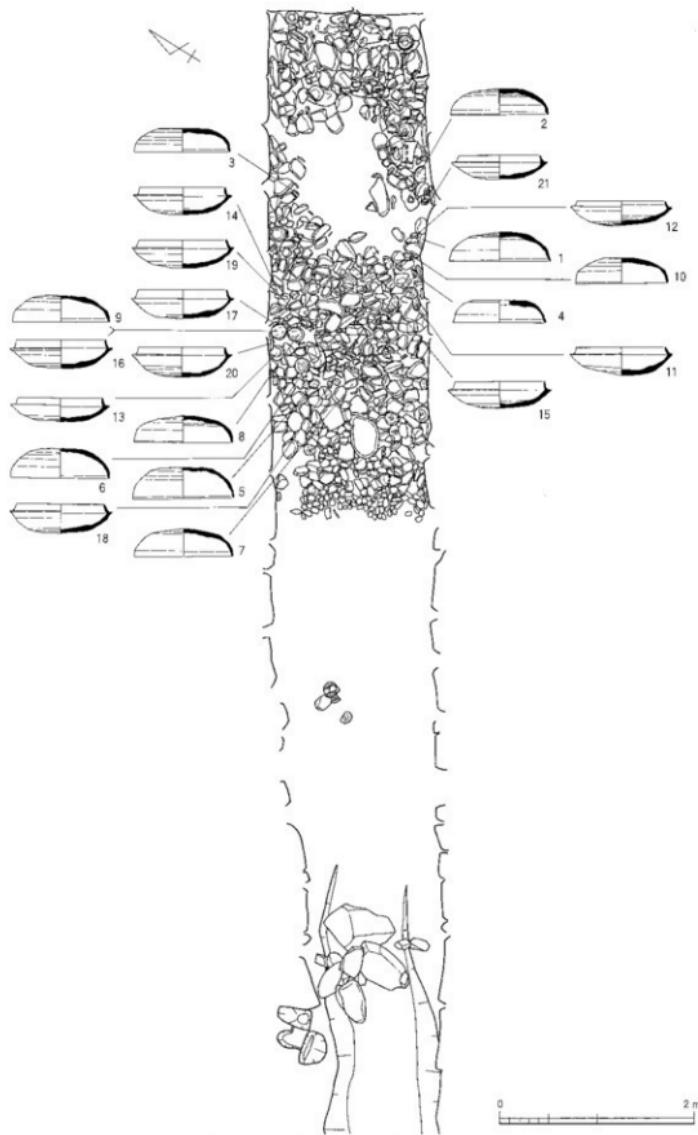
玄室の規模は長さ6.20m、幅は奥壁で1.60m、玄門で1.60mを測る。平面形は狭長な長方形を呈する。高さは最も残りの良いところで床面（標高76.70m）から2.20mあり、この上に天井石を架けたものと推測できる。また、その他の側壁もおむね1石から2石を欠いた程度と考えられ、玄門部には両側ともしっかりと立柱石（高さ1.20m、幅0.60m）を設けていた。

羨道の規模は長さ4.65m、幅は玄門で1.60m、羨門で1.20mを測る。出入り口になるほど、先細りとなっている。なお、右側壁は最先端の1石分が取り外されていた。奥壁幅と玄室長そして羨道長の比率はほぼ1:4:3となる。やはり、長い玄室が特徴である。

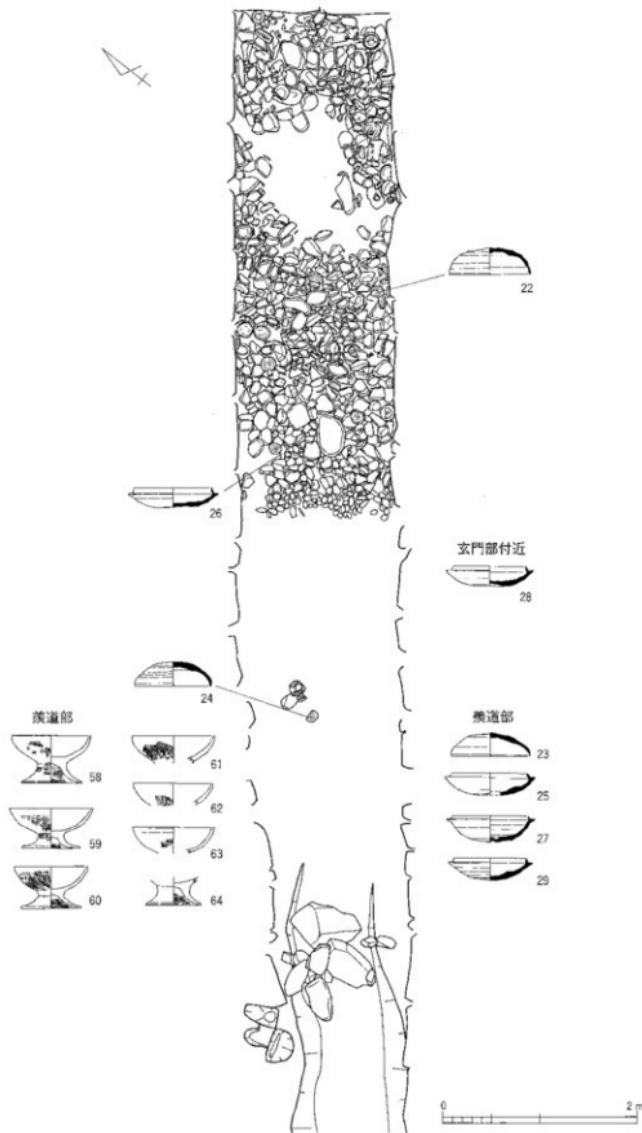
石室の構築は、地形の傾きに併せ水平（右は旧地表、左は地山面）に設けた「コ」字形の墓塙を深さ約50cm掘り下げ、奥壁と立柱石を基準にして平面プランを決め、奥壁2石と側石基底部のみ比較的大き



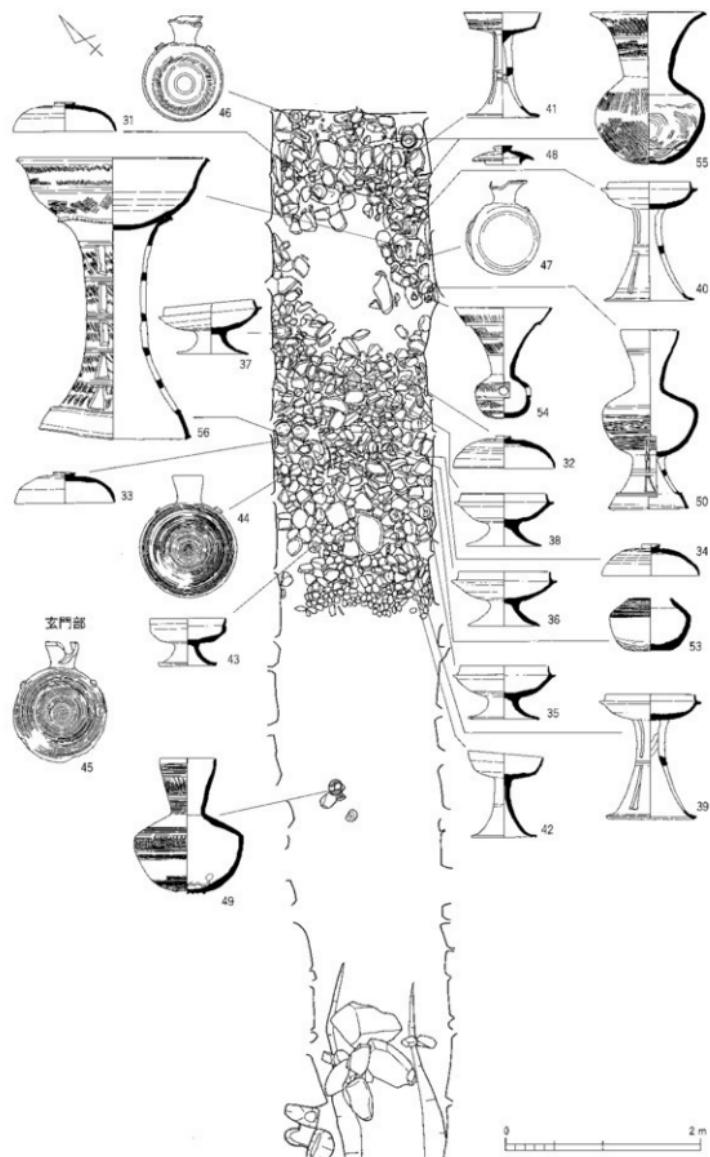
第15図 上層遺物出土位置図・立面図



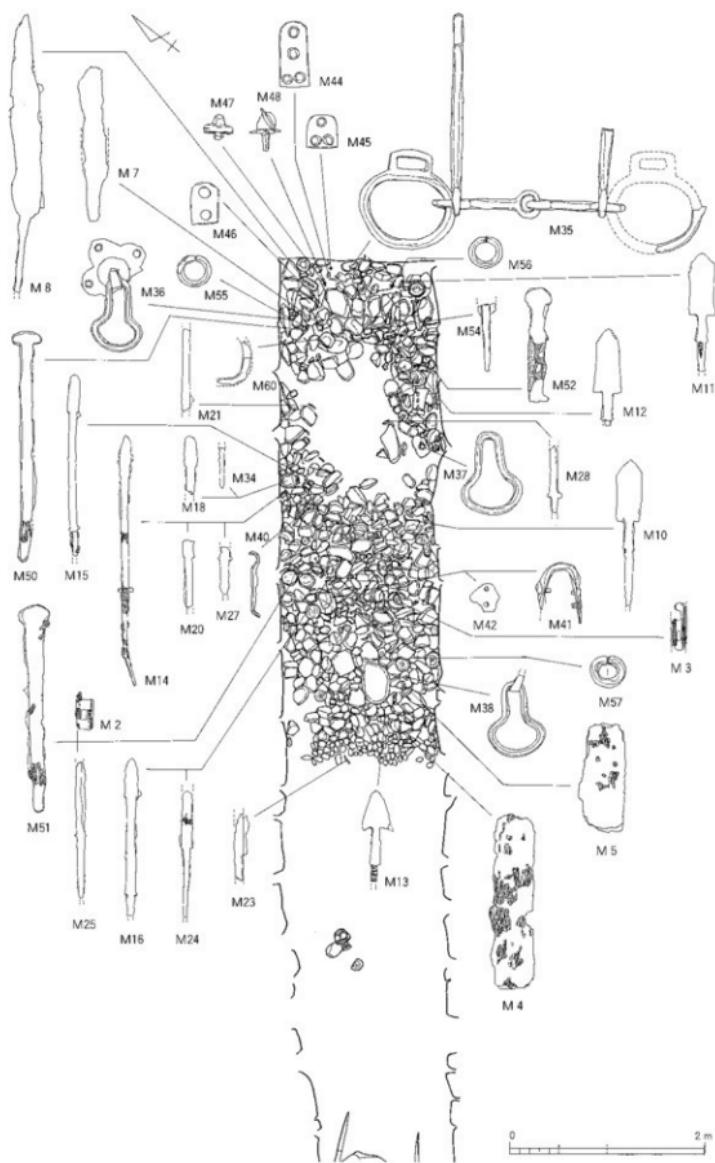
第16図 須恵器蓋杯1群出土位置図



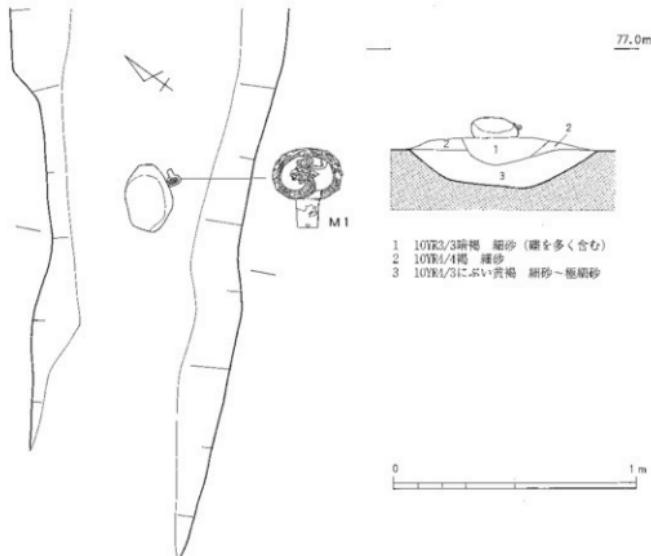
第17図 須恵器蓋・土師器出土位置図



第18図 須恵器その他出土位置図



第19図 金属製品出土位置図



第20図 環頭大刀柄頭出土状況

い石を横長に据える。それより上段の石材の積み方は小さな石が多く使用され、部分的に大きな石を配置している。また、玄室に比べると羨道の方が大きな石を使用している。目地を通そうとする意識は感じられるが、規則性は見られない。そして、両側壁は床面1.20mの高さから大きく持ち送りを行っている。これらの石材は、志染川で採取された川原石で、径30cm前後のものが多い。大きな石が足りなかつたことが原因で、石室の幅も当初予定（掘り方の大きさ）より小さくなつたのであろう。

次に玄室床面には、玄門の80cm奥から盜掘部を除いて10cm～30cmの大粒が散かれていた。また、羨門部には閉塞石が10個程度残存していた。さらに、羨門部内側2mのところから、石室の前面には幅1.2mの溝状の墓道が延びている。

なお、掘削溝南端の落ち込みは、断定できないが木棺墓だった可能性もある。

第3節 遺物

出土した遺物は窟屋1号墳に伴う古墳時代の遺物、窟屋1号墳埋没時の中世の遺物、窟屋1号墳の墳丘盛土に含まれていた縄文・弥生時代の遺物に分かれる。

古墳時代の遺物には須恵器、土師器、環頭大刀柄頭や馬具、鉄鏃などの金属製品などがあり、環頭大刀柄頭や耳環、須恵器壺・壺を除けばほとんど石室内から出土したものである。

中世の遺物は土師器、青磁、銅鏡などがあり、おおむね石室床面より1.2m上付近で出土している。ほぼ石室が埋没した段階のものである。

縄文時代の遺物には後期の土器や石器があり、主に墳丘盛土内から出土している。

1 古墳時代の遺物

石室は追葬後少し土が堆積し、墓道が埋まつた段階で、盗掘を受けたようである。盗掘は玄室中央の棺が存在していたと考えられる位置で、敷石を剥がしとるほど行われていた。しかしながら、須恵器などの土器のほとんどは石室内で位置を動かされているのみで、大きく破損されているものは少ない。また、石室前部に搔き出された痕跡も少なく、持ち出されたものは非常に少ないものと考えられる。金属製品については馬具などの鉄製品がセットとしてはやや部品が足らないようにも思えるが、盗掘によるとともに土質によって残存状況が悪くなつたことによる影響も大きいようと思われる。ただし、棺内もしくはその近辺に置かれていたと思われる大刀については石室内で盗掘時にこなごなにされ、環頭大刀柄頭は石室外前部へ持ち出されていた。

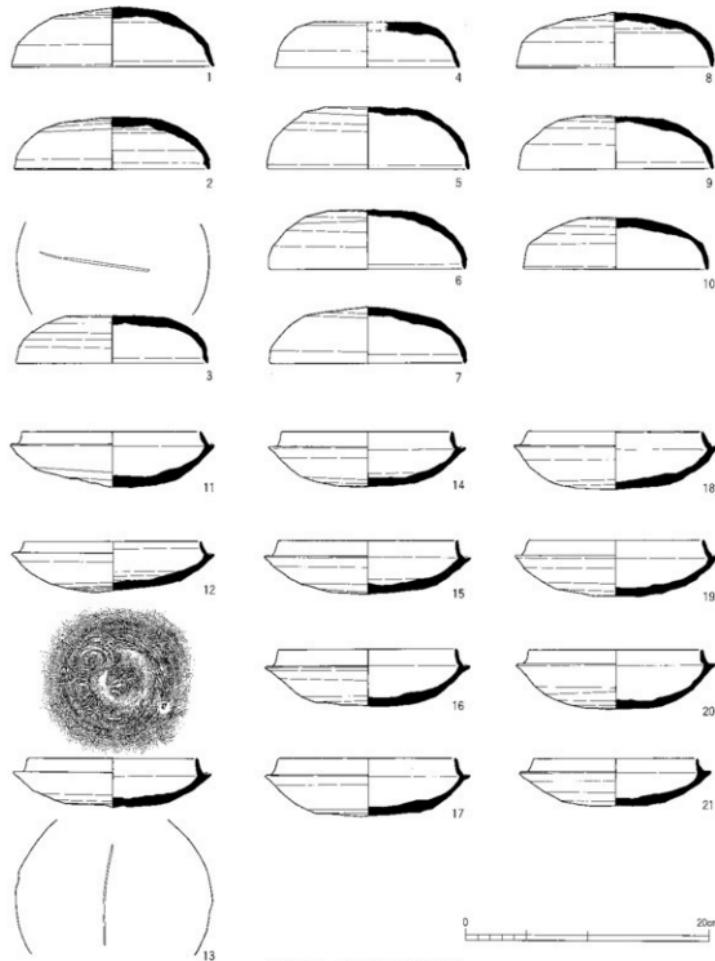
玄室の前壁から墓道部にかけて置かれていたと思われる追葬時の遺物の多くは、墳丘が削られ、石室の一部が破壊された段階での盗掘や木板の繁茂により位置が乱され、耳環1点は墳丘南東部の崩された部分に搔き出されていた。

石室内は盗掘を受けていたとはいうものの、種類ごとの出土位置はある程度まとまりをもつているようである。初葬時（I群）の須恵器蓋杯は玄室中部の壁際多く（第16図）、奥壁付近には認められない（第16図）。追葬時（II群）の須恵器蓋杯（22～30）は22と26のみが玄室内で見つかった以外は、攪乱を受けてやや位置を乱されてはいるが、土師器高杯（58～64）とともに墓道部で見つかったものである（第17図）。

蓋杯以外の須恵器については小型の提瓶（46・47）、台付長頸壺（50）、甌（54）、広口壺（55）、器台（56）などが玄室の奥側、大型の提瓶（44・45）、短頸壺（53）、無蓋高杯（42・43）、有蓋高杯（31～39）などが玄室前部側で出土している（第18図）。特に低脚の有蓋高杯（31～38）は玄室前部東側で多く見つかっている。墓道部からは台付長頸壺（49）、墓道からは短頸壺（51・52）、墳丘周辺からは甌（57）が出土している。

金属製品についてもほとんど玄室床面から出土している（第19図）。玄室中央部の攪乱部から出土したものもあるが、それでも床面に近い部分からの出土である。環頭大刀柄頭（M1）、大刀茎（M6）、耳環（M58）などが石室外から出土したものである。

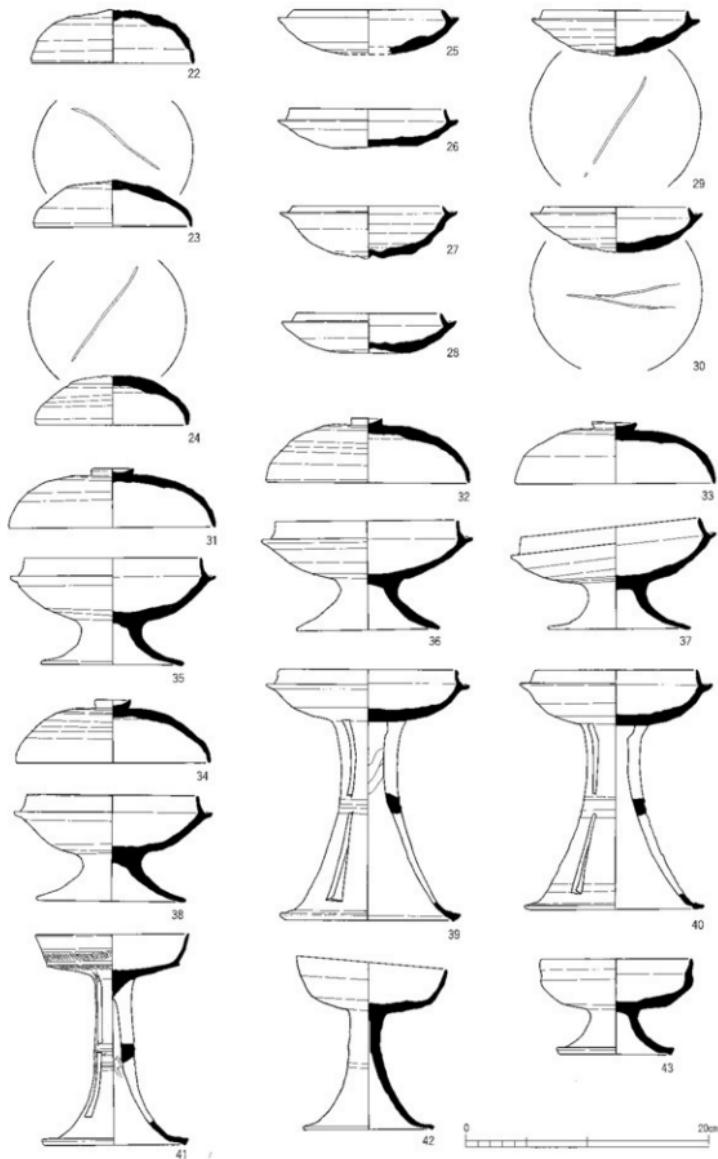
大刀は盗掘時に破損されたものと思われ、大刀本体は（M4・5）は玄室中央の盗掘部と玄室前部、鞘金具（M2・3）は玄室前部、環頭大刀柄頭（M1）、大刀茎（M6）は墓道埋土上層から出土している（第20図）。刀子（M7・8）は玄室奥壁側で出土している。鐵錐は長三角形錐が東壁側、長頭錐が西壁側で出土している。馬具については轡（M35）、鞍（M36）、銀留金具（M44～46）、貝製飾金具（M47・48）など玄室奥壁側で出土しているものが多いが、鞍（M37・38）や鐙（M41・42）は玄室前・中部で出土している。鉄釘はM50・52～54が玄室奥、M51が玄室前部から出土している。耳環はM55・56が玄室奥、M57が玄室前部、M58は墳丘東南側攪乱部から出土している。



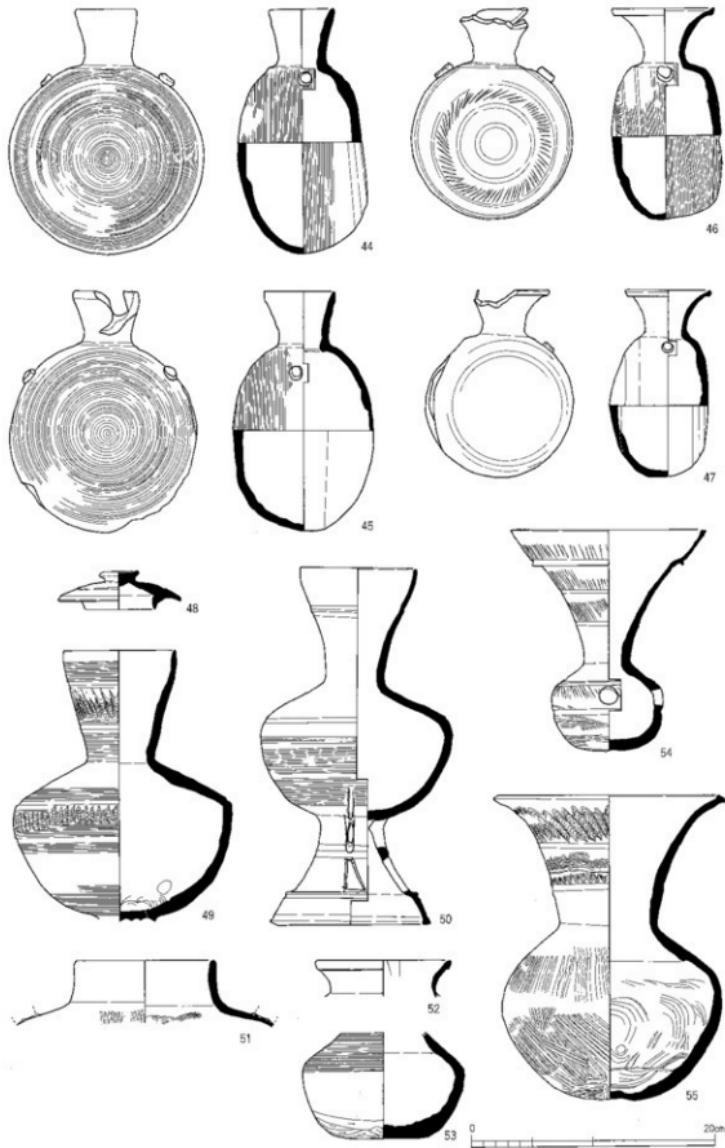
第21図 須恵器蓋 I 群

土器（第21～25図）

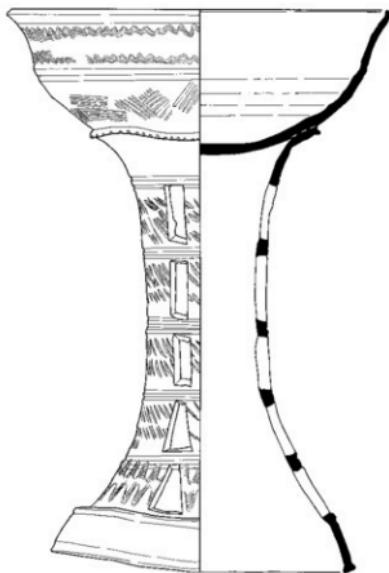
須恵器蓋杯（1～28）・有蓋高杯蓋（31～34）・有蓋高杯（35～40）・無蓋高杯（41～43）・提瓶（44～47）・台付長頭蓋（48）・台付長頭壺（49・50）・短頭壺（51～53）・甌（54）・広口壺（55）・皿形器台（56）・巣（57）・土師器高杯（58～64）などがある。1～22・26・31～44・46～48・50・5
3～56が玄室床面、30が玄室埋土、28・45が玄門部埋土、24・49が狭道床面、23・25・27・29・58～64



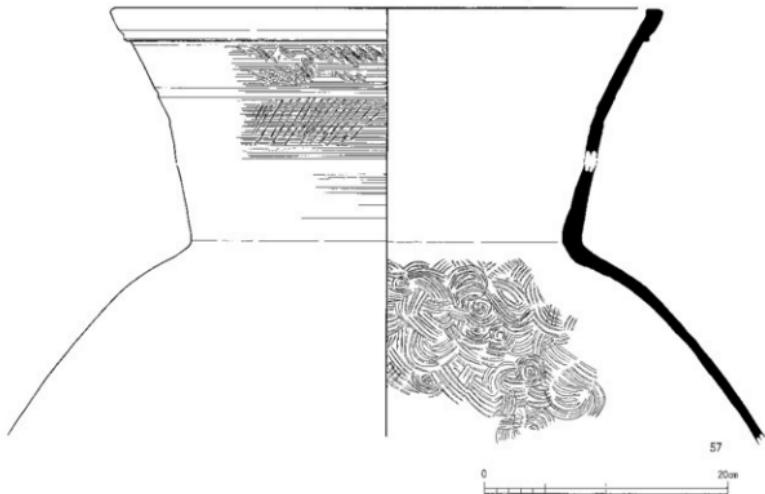
第22図 須恵器蓋杯II群・高杯



第23図 須恵器壺類



56



57

0 20cm

第24図 須恵器器台・壺

が羨道埋土、51・52は墓道埋土、57は墳丘外から出土したものである。

須恵器杯蓋は口径の大きいI群と小さいII群に分かれる。I群は口径16.6~14.95cmである。天井部外面の1/2程度に回転ヘラケズリが施されている。口縁部内面に面をもつものが多く、8・9は面をもっていない。外面の色調によって紫色のI-1群(1・2)、赤橙色のI-2群(3・4)、灰白色のI-4群(5~10)に分かれる。

II群は口径13.2~12.35cmである。22は天井部外面にヘラケズリは施されていない(II-2群)。23・24はヘラ記号をもっている(II-3群)。23は天井部外面に粗くヘラケズリが施され、24はヘラケズリが施されていない。

須恵器杯身も口径の大きいI群と小さいII群に分かれる。I群は口径14.55~13.4cmである。底部は比較的平坦で、底部外面の1/2~2/3にヘラケズリが施されている。口縁部には面をもたない。外面の色調によって紫色のI-1群(11・12)、赤橙色のI-2群(13)、灰色のI-3群(14)、灰白色のI-4群(15~21)に分かれる。杯蓋と杯身は2と12、3と13、6と16、9と20、10と21がセットと考えられる。

II群は口径12.6~11.8cmである。25は底部外面にヘラケズリが施され(II-1群)、26~30は底部外面にヘラケズリは施されていない。29・30は底部外面にヘラ記号をもっている(26~28はII-2群、29・30はII-3群)。

31~34は須恵器有蓋高杯蓋である。35~38の有蓋高杯とセットであると考えられる。口縁端部内面に面をもっていない。つまりの中央は窪んでいる。

35~38は短脚の須恵器有蓋高杯である。脚部は大きくハの字形に開き、端部には面をもっていない。杯部のサイズはI群の杯身とほぼ同じである。

39・40は長脚3方2段透かしの須恵器有蓋高杯である。この高杯とセットとなる蓋は出土していない。

41~43は須恵器無蓋高杯である。41は脚部が長脚3方2段透かしである。口縁部・脚端部は薄手で、稜が鋭い。杯部に列点文が施されるなど54のはそと類似している。42は長脚であるが透かしは入れられておらず、杯部も無文である。43は短脚である。42・43は出土位置からすると追葬時のものである可能性が高い。

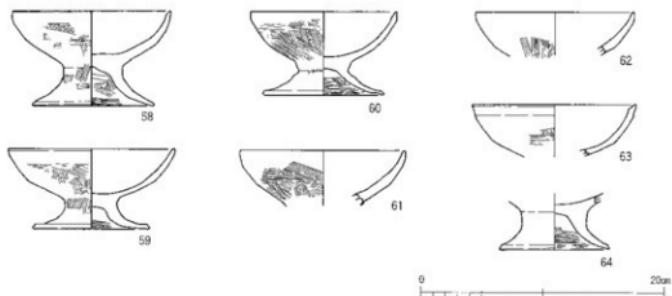
44~47は須恵器捷瓶である。肩部にボタン状の把手の痕跡をもっている。口縁部が44・45は直線的で、46・47は大きく開き、端部が拡張している。44の体部は円盤充填側にカキ目が施され、反対側はヘラケズリが施されている。45の体部は円盤充填側に回転ナデが施され、反対側にカキ目が施されている。46の体部は円盤充填側に回転ナデが施された後凹線文と列点文が施され、反対側は列点文が施されている。47は両面とも回転ナデが施されている。

48は須恵器蓋である。台付長頸蓋(50)の蓋に相当するものと思われる。

49・50は須恵器台付長頸蓋である。49は口縁部・体部とともにカキ目調整が施された部分が多く、口縁部には波状文、体部には列点文が施されている。脚部は欠失している。50は体部下半のみカキ目調整が施され、口縁部および肩部に凹線が彫らされている。

51~53は須恵器短頸蓋である。51は直立する口縁をもっている。体部外面は平行タタキが施されている。肩には把手が着いていたようである。52は口縁部が開き、端部は肥厚している。53は体部上半にカキ目が施され、肩が張っている。底部は手持ちヘラケズリが施されている。

54は須恵器甌である。口縁部の屈曲部の稜は鋭く、口縁部・頸部上半、体部中位に列点文が施されて



第25図 土師器高杯

いる。底部外面下半はハケ目、底部外面は板ナデが施されている。

55は須恵器広口壺である。口縁部の波状文は粗い。器台（56）とセットになっていたと考えられ、底部外面には、器台と重ねて焼いた時の薙状痕がついている。

56は須恵器器台である。鉢部は体部下半から底部外面にかけて平行タタキが施されている。口縁部外面の波状文は粗い。鉢部の内底面には赤色顔料が付着している。赤色顔料は分析の結果ベンガラの可能性が考えられる（第4章第2節参照）。脚部は3方に透かしが穿たれ、上3段は長方形、下2段は台形である。施文は上4段が列点文、下1段が波状文である。

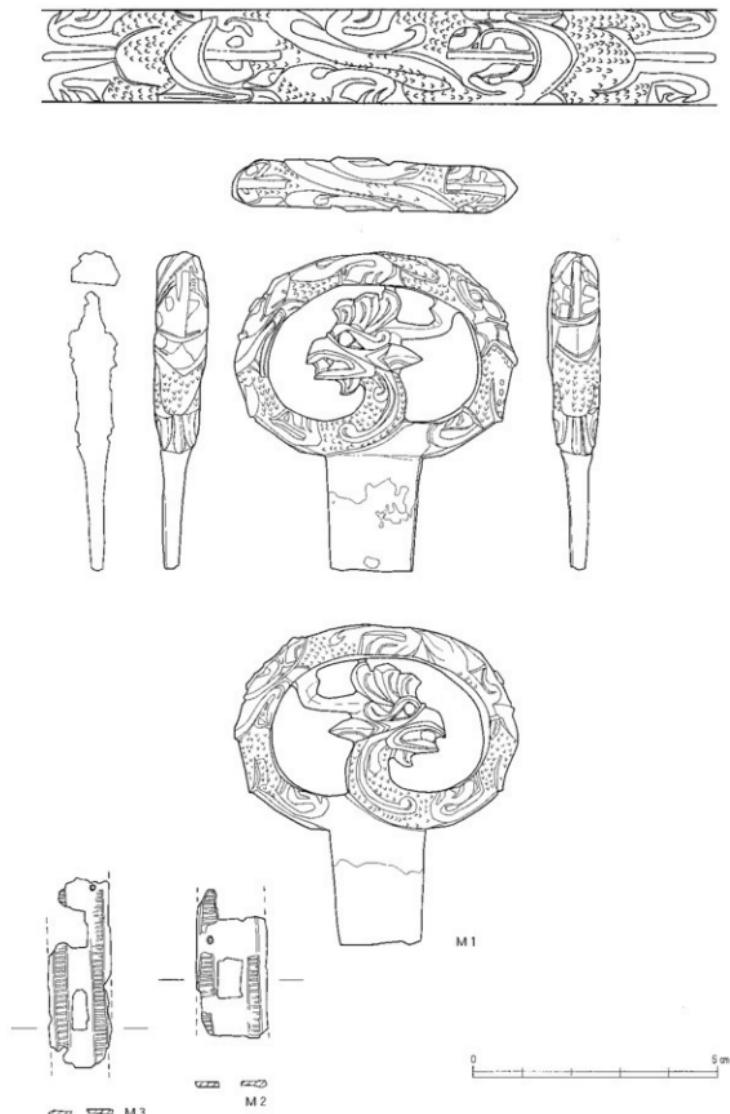
57は甕である。体部外面は平行タタキと思われるが、自然軸が厚く掛かり不明瞭である。口縁部外面上位に粗い波状文、中位に列点文が施されている。

58~64は土師器高杯である。杯部は碗形で、脚部は短脚である。

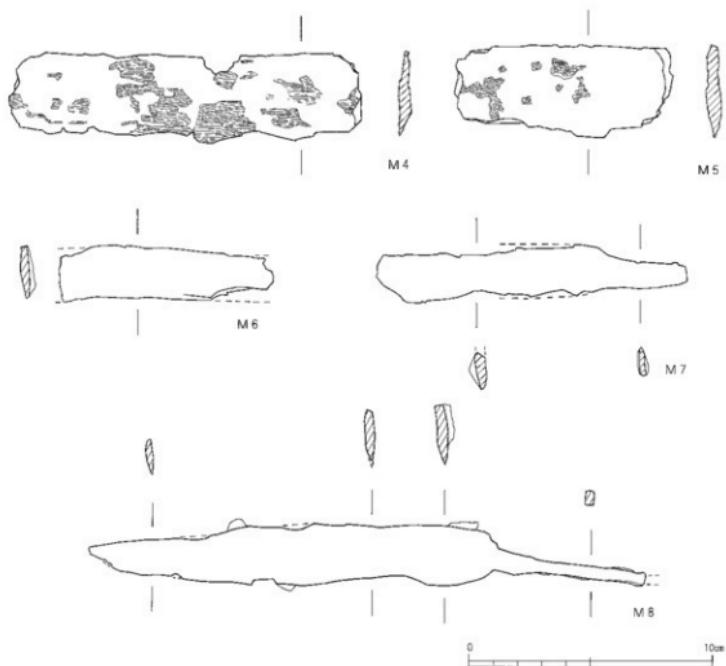
金属製品（第26~32図）

大刀（環頭大刀柄頭・鞘飾金具）、刀子・鉄鎌・馬具（轡・鐙・鞍・具製飾金具・銀留金具）、鉄釘・耳環などがある。環頭大刀柄頭（M1）、大刀（M6）、耳環（M58）以外は玄室内から出土したものである。鉄製品については残存状況があまり良好でないものがあり、銀接面に沿って層状に膨張・剥離し、特に刃部が不明瞭になってしまったものが多い。

M1は金銅製單鳳環頭大刀柄頭である。前庭部墓道上層より出土した。環内は横を向いた1羽の鳳凰が嘴に玉を噛むタイプのもので、環部には龍が表現されている。鳳凰・龍とも体表にはU字形の工具によって打刻して、羽毛・鱗が表現されている。地金は青銅で、表面には鍍金がなされ、鳳凰の口の中には水銀朱が塗られている（第4章第1節参照）。環部は幅5.8cm、長さ4.2cmと小さい。茎の長さも2.4cmと短いが、茎部の先端は凸凹が認められ、折損した可能性が高い。茎に目釘孔は認められない。環部の表面は丁寧に研磨され、加工痕などは確認できない。環内の鳳凰は三本の冠毛がくっつき、角の先端はあまり巻きあがっていない。一番後ろの冠毛と角の先端が環部にくっついている。耳は角にくっつかず、後ろに大きく張り出している。頸毛は長短2本延びている。嘴・眉・耳・冠毛・頸ひげ・頸毛は沈線を入れて表現されている。環部の龍文はかなり単純化されているが、頭部の口・眉・耳・頸ひげ・角などは確認でき、かろうじて側面観は保っている。角は直線的で、先端の側面から見た屈曲はなくなり先端



第26図 金銅裝環頭大刀



第27図 鉄刀

部が少し盛り上がっている。冠毛の上有る足の表現は指の表現がなくなり退化している。

M 2・3は鞘飾金具である。玄室床面で出土した。幅1.4~1.5cm、厚さ1mmで、長方形の透かし穴が約1.7cm間隔で並んで穿たれている。透かし穴の両脇は毛彫りで連子状の文様が入れられている。留穴は両側の連子状の上に交互に穿たれている。

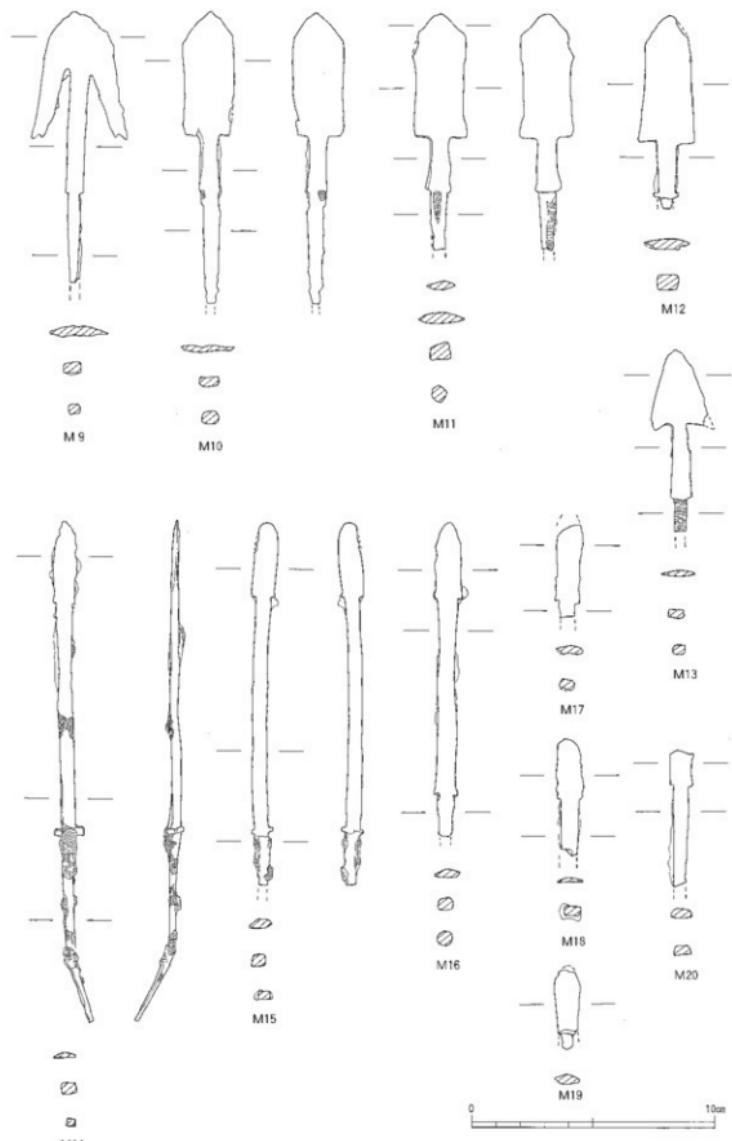
M 4・5は大刀の同一個体の破片と思われる。実測したもの以外にも破片が存在する。玄室床面・玄室中央攪乱部で出土した。層状に膨らんで、片面は剥離しており、刃部はわからなくなっている。反対側の面には木質が付着している。残存部の最大幅は3.7cmである。

M 6は人刀の茎の部分の可能性がある。前庭部墓道埴土上層から出土した。茎であるとすれば、尻が隅折りになっているようである。

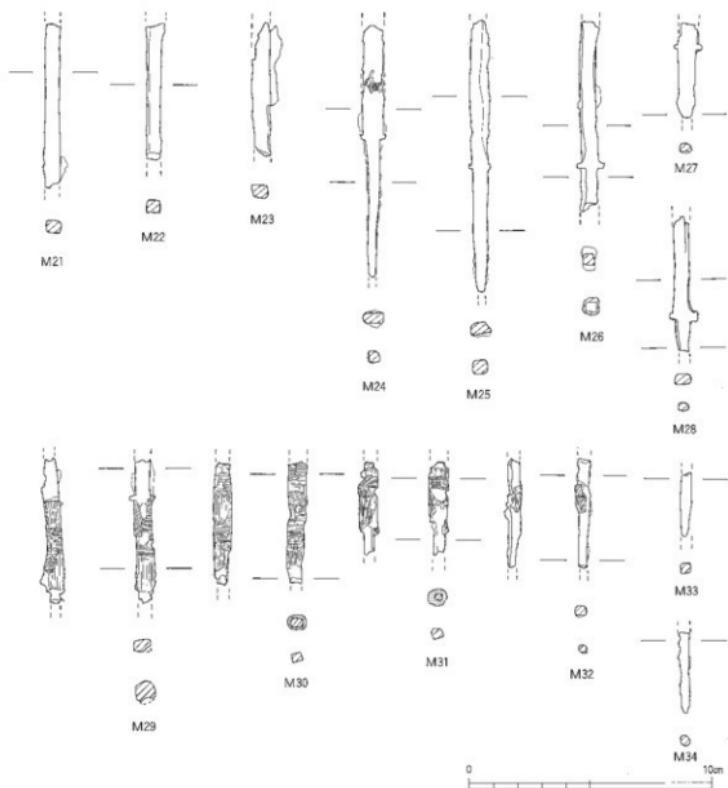
M 7は刀子である。玄室床面で出土した。周囲が剥離しており不明瞭であるが、両開のようである。

M 8は刀子である。玄室床面で出土した。関は両開で、茎部が異様に細い。

M 9~31は鉄鎌である。いずれも玄室床面で出土した。M 9・13は鶴拵三角形鎌である。M 9は深い逆刺をもち、逆刺の先端が二叉に分かれている。関は直角関である。M 13は逆刺が浅く、関は直角関である。



第28図 鉄鎌 1



第29図 鉄鏡 2

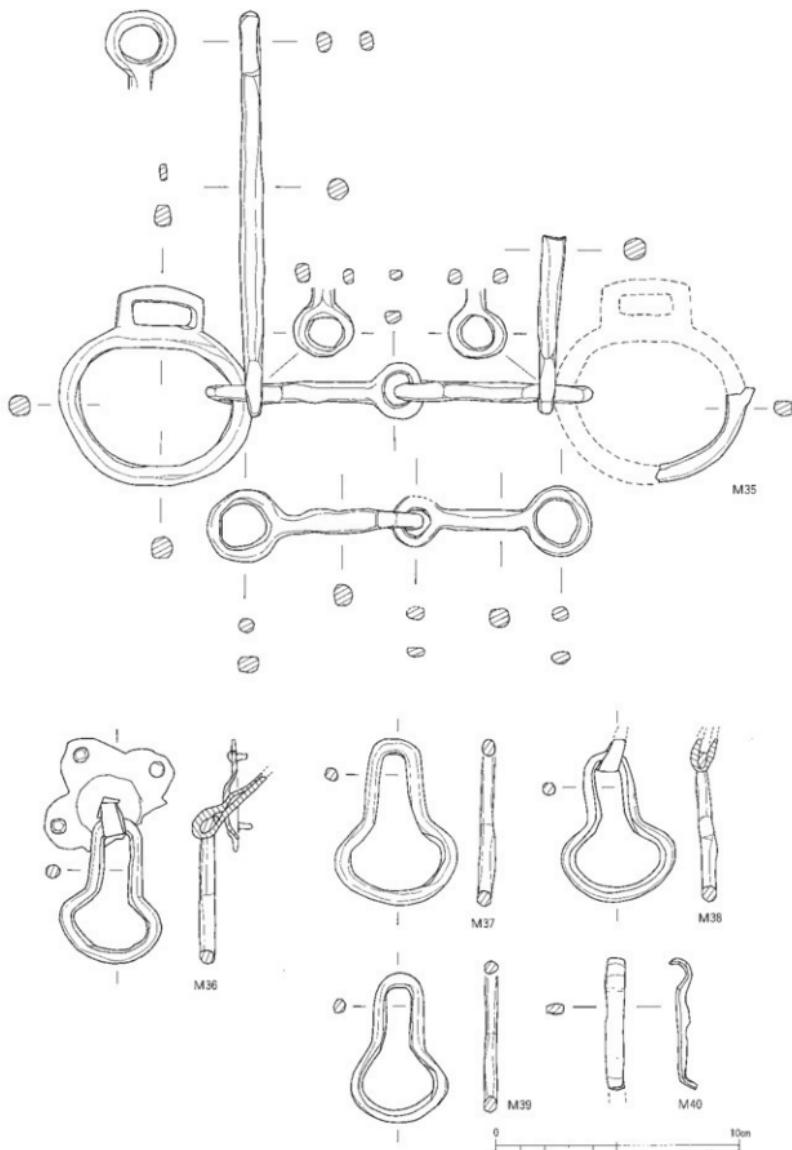
M10~12は長三角形鏡である。闊は台形闊である。

M14~20は長頭鏡である。輪状闊をもち、鏡身部は柳葉形を呈しているようである。最も残りの良いM14で全長20.6cm(鏡身長3.4cm、頭部9.2cm、茎部長8.0cm)である。

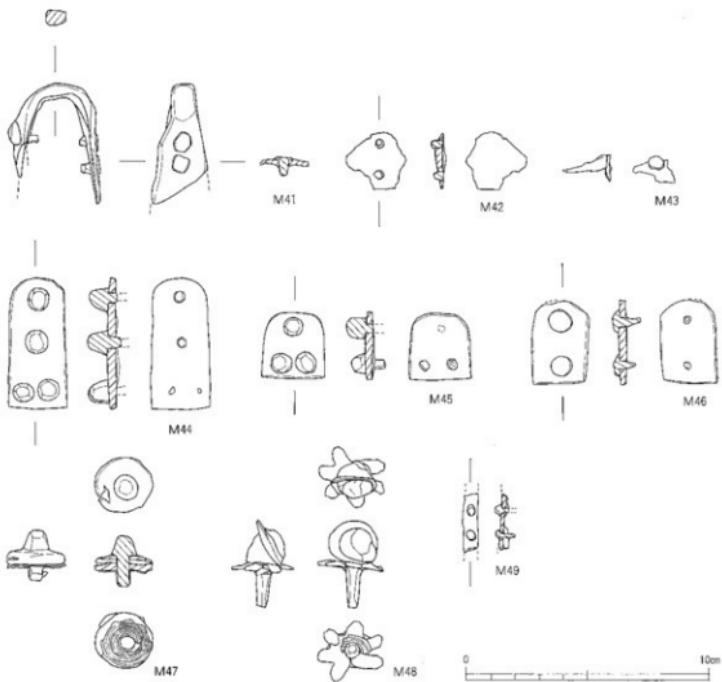
M21~23は鏡の頭部の破片である。M24~28は闊部を含む頭部・茎部の破片である。いずれも輪状闊をもっており、長頭鏡の一部である可能性が高い。M29~32は茎部に比較的よく木質を残すものである。M33・34は鏡の茎先端の破片である。

M35は素環鏡板付巻である。玄室床面で出土した。素環の鏡板には矩形立闊をもっている。環の形状は7.85cm×6.8cmとの楕円形である。立闊は幅3.5cmで、鉢形に取り付けられている。手は銜先環の大きい大環手で、引手が連なっている。引手は直柄引手である。

M36~40は鞍金具である。M36~38・40は玄室床面、M39が玄室中央の盜掘部から出土した。輪金



第30図 馬具 1



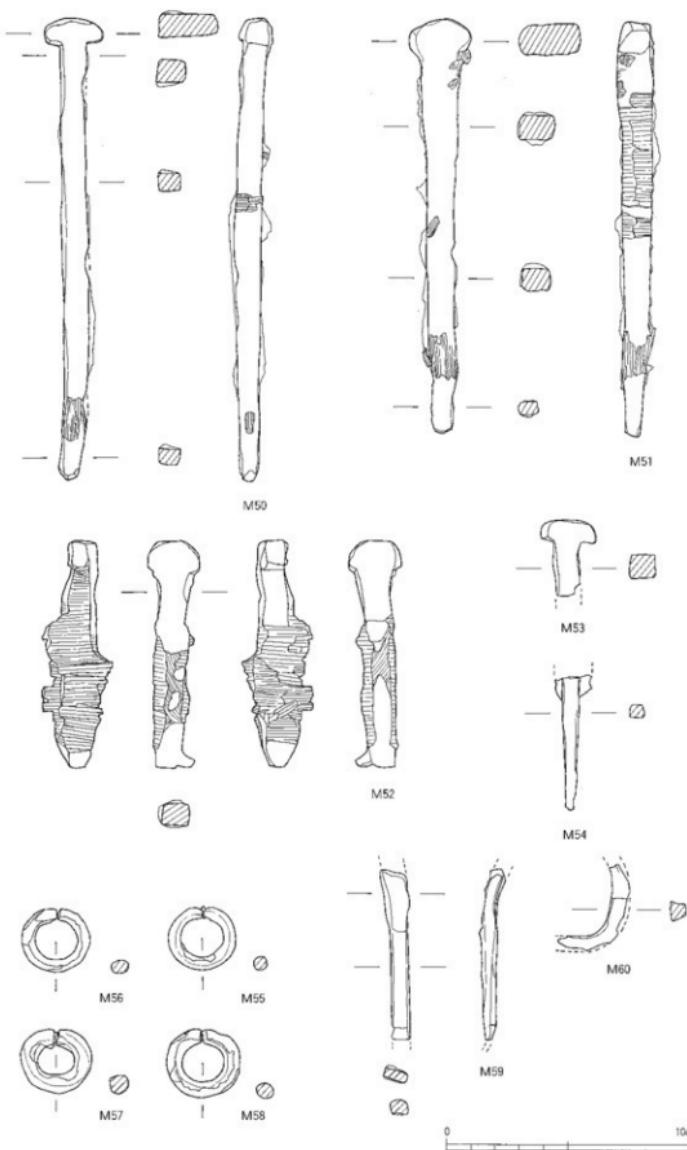
第31図 馬具2

(M36～39)は4点出土しており、幅が約8cmもの(M36・39)と約10cmのもの(M37・38)の大小に分かれるかもしれない。いずれも刺金をもたず左右に張り出している。M36は座金具が残っている。中央部が半球状にふくらみ、周囲は5弁花形である。各花弁に円頭の鉢が打ち込まれ、鞍橋に固定されていたようである。

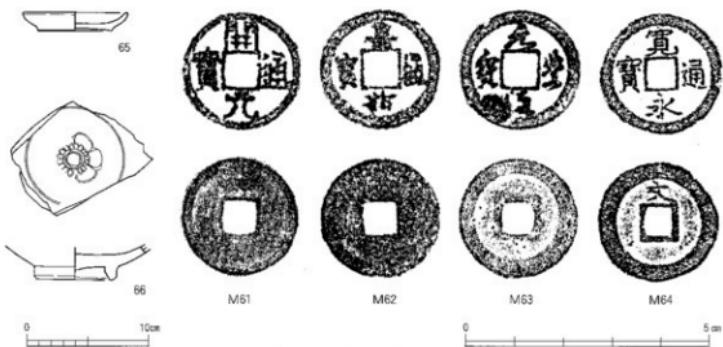
M41～43は木製壺蓋の鍍金具である。M41・42は玄室床面、M43が玄室中央の盜掘部から出土した。M41はU字形の吊手部と脚部の上部が残り、M42・43は脚部の破片と考えられる。鉢間は1.2～1.3cmである。鉢頭は平たくつぶされている。

M44～46は嵌留金具である。玄室床面から出土した。いずれも片側の鋸刃が弧状になっている。M44・45は鉢頭が高く盛り上がり、M46は鉢頭が平たくつぶされている。

M47・48は貝製飾金具である。玄室床面から出土した。M47は鉄製の円盤に高い円頭の鉢が差し込まれ、鉄板の下面から鉄板の下に突き出た鉢の部分にかけて渦巻き状の貝の痕跡が付着している。表面にはわずかに金、銅サビが認められることから鉄地金銅貼りと考えられる。M48は土星の輪状の縁をもつ珠形の鉢頭で、7弁と考えられる花弁形の座金具をもっている。座金具の下面にはわずかに渦巻き状の貝の痕跡が付着している。



第32図 鉄釘・耳環・その他



第33図 中世以降の遺物

M49は鞍の縁金具の一部の可能性がある。玄室床面から出土した。幅6mmの鉄板に1cm間隔で円頭の細かい鉄が打たれている。裏面には木質が付着している。

M50～54は鉄釘である。玄室床面から出土した。頭部は2方向に引き延ばされて作りだされている。残りの良いもので全長19cm、断面は1cm前後の方形である。上半部に横方向の木目、下半部に縱方向の木目が付着したものが認められる。これらは側板から小口板に打ち込んだと考えられるもので、上半部の木目の幅から側板の厚さが8cm程度であったことが分かる。

M55～58は耳環である。いずれも銅芯銀貼で、地金は中実である。M55・56は断面径が5～7mmとやや細く、玄室奥で出土しており、初葬時のセットと考えられる。M57・58は断面径が6～7mmとやや太い、M57は玄室前部、M58は墳丘東南擅乱部から出土したもので、追葬時のセットと考えられる。

M59・60は不明鉄製品である。玄室床面から出土した。M59は断面長方形の棒状の製品であるが、片側は薄くすぼまり。片側は扁平になってななめに折れ曲がっている。M60は弧状の破片で、弧の内側に平坦な面をもち、断面はこの面を下にして台形を呈している。

2 中世以降の遺物（第33図）

65・66、M61～63は石室の床面より約1.2m上方の石室内から出土したもので、石室がほとんど埋没した時点のものと考えられる（第15図）。M64は墳丘外から出土したものである。

65は土師器小皿である。底部は回転糸切りである。12世紀頃のものと考えられる。

66は青磁碗である。見込みに花文のスタンプが押されている。高台内の露胎である。

M61～64は銅錢である。M61は621年初鑄の開元通寶、M62は1056年初鑄の嘉祐通寶、M63は1078年初鑄の元豐通寶である。M64は寛永通寶である。背面に「文」の字をもつ「文錢」（铸造年1668～1683年）である。

3 縄文・弥生時代の遺物

墳丘及びその崩落土中からは縄文時代中期・後期・晩期、弥生時代中期の土器や石錐・石錘・叩石などの石器が出土している。調査区内からは該当する時期の遺構は見つかっていない。また周囲でも同時期の遺跡は見つかっていないが、近隣に同時期の遺跡が存在するのであろう。三木市内では本遺跡以外に縄文土器が出土しているのは戸田遺跡（三木市教育委員会2000）のみであり、当地域において貴重な出土例ということができる。

土器（第34・35図、写真図版25・26）

古墳掘削時および石室解体時に出土した古墳築造以前の土器（縄文土器・弥生土器）をまとめて記述する。出土した土器はすべて破片であり、このうち口縁部と底部が存在する破片と体部でも文様が存在する破片を抽出して実測・採拓した。

縄文中期土器（67）

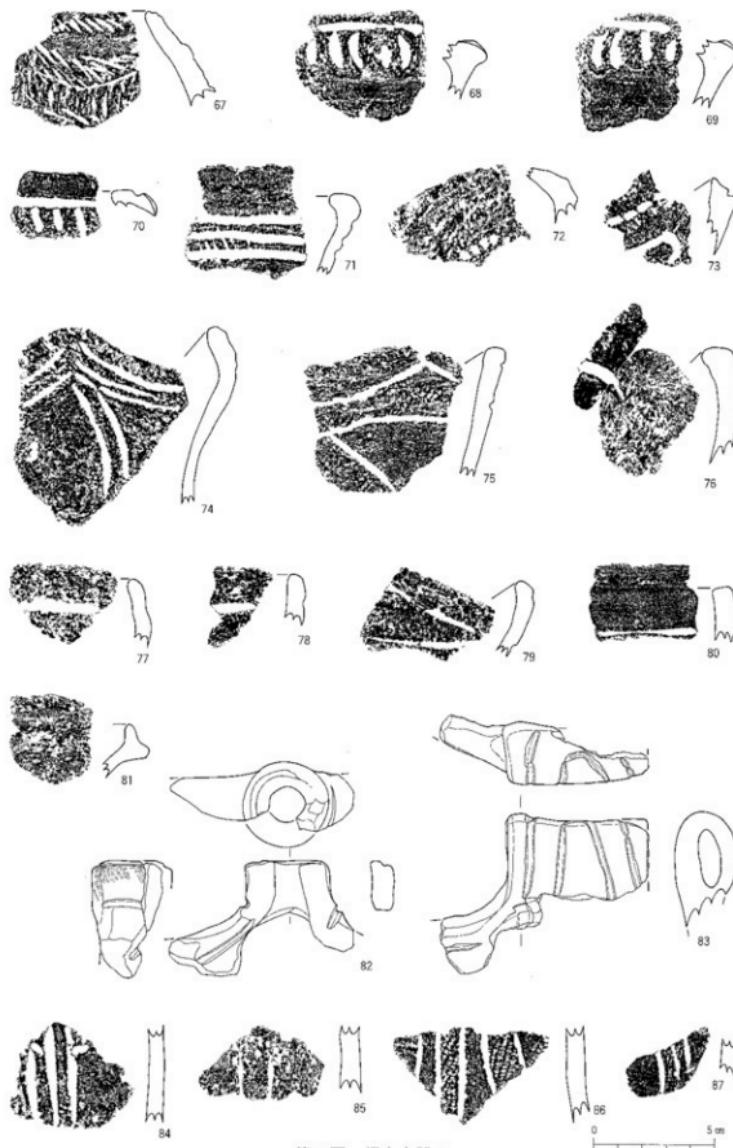
67は内傾する口縁部で、荒い縦位の縄文地に刻み目陳帯を施文する。口縁端部に刻み目を付けている。

縄文後期土器（68～113）

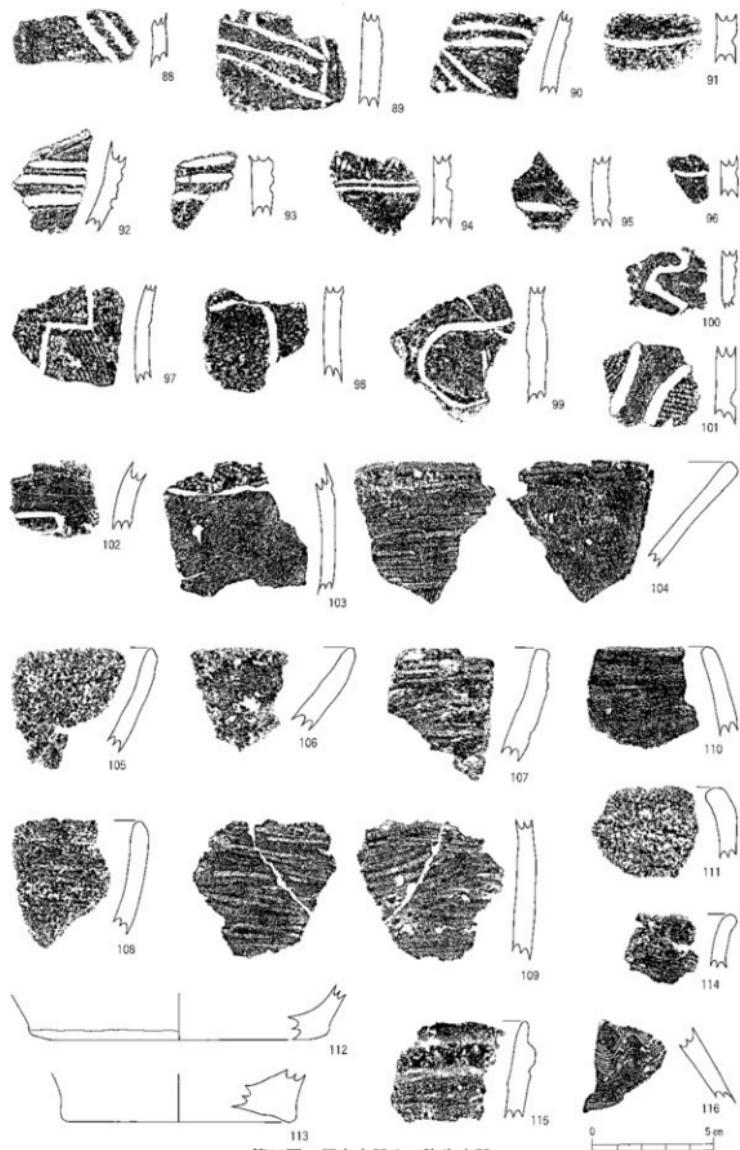
68～70は肥厚した口縁上端に1本の沈線を巡らし短沈線を施文する。71は口縁部が内窓した平縁で口縁部直下に横位の3本沈線が走る。72・73は波状口縁で、72は荒い条痕で仕上げ、口縁外面に刺突で区画文を施文する。73は拡張した口縁端部に押引き沈線を施文し、口縁直下には沈線で区画文を施文する。74は内窓した波状口縁で、口縁部に3本沈線を施文し、2本の曲線的な沈線が乘下する。75は波状口縁で、曲線で沈線を施文し、縄文を充填する。76は内窓した波状口縁で、口縁端部から側面にかけて沈線を施文する。77・78は口縁部直下に横位の1本沈線が走る。79は波状口縁で、1本沈線で施文する。80は平縁で口縁部直下に横位の1本沈線が走る。端部に面を作り、丁寧なミガキで仕上げる。81は口縁端部を内外に拡張する。82は波状口縁の波頂部に縦位の注口状突起を付ける。1本の沈線とR L撫りの縄文で施文する。83は波状口縁の波頂部に横位の筒状突起を付ける。2本沈線で施文する。84は垂下する複数の沈線を斜行する沈線が切っている。85は間隔の広い2本沈線で施文する。86は間隔が一定ではない複数の沈線を施文し縄文を充填して、交互に磨消す。87は細い3本沈線で施文する。88は斜行する2本以上の沈線を施文する。89・90は細い3本沈線で施文する。89は沈線が切り合う。91・95・96は横位の沈線を施文する。92・93は太めの3本沈線で施文する。94はR L撫りの縄文地に半裁竹管で沈線を引き磨消す。97は鉤状に沈線とR L撫りの縄文で施文する。98・99は沈線で指円文を施文する。100は沈線で蛇行垂下文を施文する。101は太い前線の沈線を施文し縄文を充填して、丁寧に磨消す。102は沈線で区画文を施文し、内外とも丁寧にミガキを行う。103は沈線にR L撫りの縄文を施文し、丁寧に磨消す。内面も丁寧に磨いていたため、浅鉢の可能性が高い。

104～111は無文の深鉢である。104は外傾する口縁部で、外面はナデを行い、内面は荒い条痕の後ミガキを行う。105・106は外傾する口縁部で、磨滅している。107～109は横方向に二枚貝条痕で調整を行っている。110は内傾する口縁部で内外とも丁寧にミガキを行う。111は内窓する口縁部である。

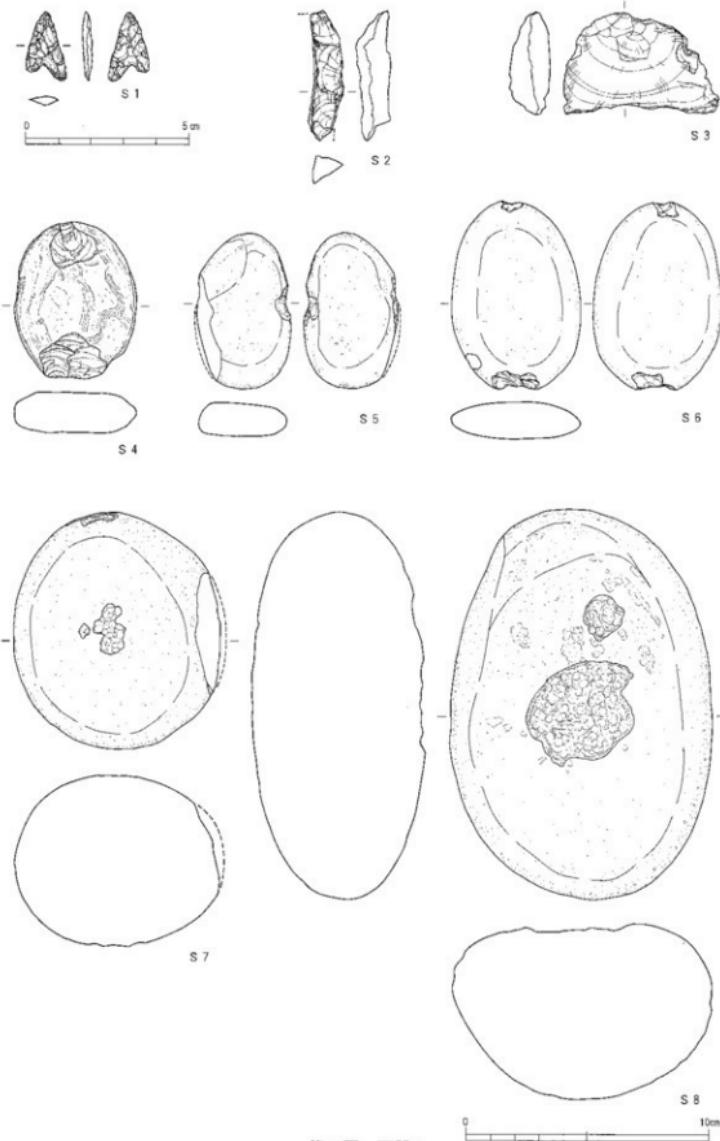
112・113は底部の破片で112は平底でナデを行っている。113は高台状の底でナデを行っており、一部指頭圧が残る。



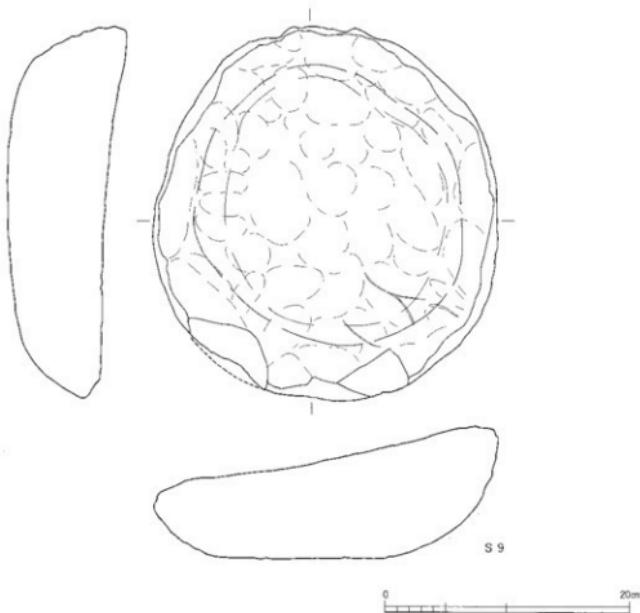
第34図 繩文土器 1



第35図 縄文土器2・弥生土器



第36図 石器 1



第37図 石器 2

縄文晩期土器 (114・115)

114は口縁部の小片で、短く外反している。口縁端部は丸く仕上げており、下方に突帯が付くと考えられる。115は口縁部の破片で、直線的に外傾し、口縁端部は雑に作る。口縁下部に押圧の大きい突帯を貼り付ける。

弥生土器 (116)

116は広口壺の体部上半の破片である。10本一単位の櫛摺波状文と直線文を施文している。

小結

以上、縄文時代後期初頭の中津式 (76)、縄文時代後期前葉の福田KⅡ式 (71・74・90) から縄帶文土器成立期の広瀬土壙40段階 (68~70) を中心として、縄文時代中期船元Ⅱ式A類 (67) や縄文時代第晩期末の突帯文期 (114・115)、弥生時代中期中葉 (116) が存在している。

いずれの遺物も該当する時代の遺構からは出土していないが、古墳周辺に縄文時代などの遺構が存在していた可能性が指摘できる。

石器 (第36・37図 写真図版27)

S 1 はサスカイト製の凹基式石鏃である。2個縁が直線的な二等辺三角形状を呈し、基部は抉りが深く鋭利な脚端部を持つ。

S 2 は墓道埋土中から出土したサヌカイトを用いた楔形石器である。現状では横断面形が三角形状を呈し、図示した面の左側面は剪断面、右側面は自然面を留める。圓正面の右側から大きな剥離が加えられた後、上下両端の両極打法により上端の細かい剥離が生じ、その際左側の剪断面も形成されたと考えられる。同時に、下部も欠損したと思われるが、欠損後もなお縁辺に微細な剥離が認められる。

S 3 はサヌカイトの剥片で、腹面側では右端 1ヶ所に剥離が施されるのみである。背面側では自然面を残し、上方から剥離を試みようとした痕跡がわずかながら認められる。

S 4 ~ S 6 は打ち欠き石錐である。いずれも扁平な橢円形碟の両端に打ち欠きを設けている。S 4 は圓の正面側のみから上下端を、S 5 は両面から左右端部を、S 6 は両面から上下端部を打ち欠いている。なお、3点ともに表面の研磨は不明瞭であり、自然碟をそのまま用いているようである。重量は S 4 が、77.5 g、S 5 が 53.5 g、S 6 が 97.5 g を計り、石材は、S 4 がチャート質の変成岩、S 5 が砂岩、S 6 が泥岩である。

S 7 は閃綠岩を用いた叩き石である。両面の中央部に、凹み石ほどではないものの潰れが認められ、また側面にも 2ヶ所潰れが認められることから、敲打具としての使用が考えられる。重量が 824 g あり、見た目に受ける印象より重く、比重が高い。

S 8 は花崗斑岩を用いた台石で、中央に大きく 1ヶ所、その脇に小さく 1ヶ所、集中的な敲打によってつくりだされた凹みが認められる。

S 9 は石皿であろう。中央全体が浅くくぼみ、よく摩耗している。この上面がやや傾く状態ではあるが、底面に従って置くと安定する。風化が激しいが、安山岩質の石材と思われる。

第4章 自然科学的分析

第1節 金銅製单鳳大刀環頭の分析

窟屋1号墳より出土した金銅製单鳳大刀環頭（M1）の保存処理にあたって、事前に金属製品保存処理担当の岡本が独立行政法人奈良文化財研究所において、埋蔵文化財センター高妻洋成氏の指導と助言を得て蛍光X線分析による材質調査・X線写真撮影を行った。

1 蛍光X線分析（第39図）

調査は、平成13年11月8日に奈良国立文化財研究所（当時）において行った。調査にはエネルギー分散型微小点蛍光X線分析装置（株式会社テクノス社製 TREX650）を用いた。ターゲットはモリブデン（Mo）、管電圧は45kV、管電流0.3mA、測定時間300sec、コリメーターは1mmφを使用し大気圧中で測定した。測定箇所は環頭表面の金屬部分、環内の鳳凰の口内に付着する赤色顔料の部分、地金部分の3箇所である。

金層については金（Au）、銅（Cu）の元素の他に水銀（Hg）の元素が検出されたことから、この環頭は金アマルガム法で鍍金されていることが確認できた。

鳳凰口内の赤色顔料については銅に次いで水銀の元素が検出されたことから赤色顔料は水銀朱と考えられる。

地金については銅、錫が大きく反応し、その他に微量元素として銀（Ag）、ビスマス（Bi）が含まれていた。のことから、地金は青銅と確認できた。



第38図 環頭大刀柄頭 X線写真

2 X線透過試験（第38図）

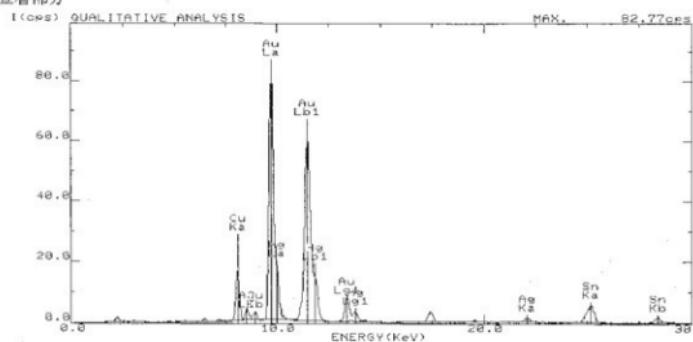
埋蔵文化財調査事務所にあるX線撮影装置では出力が低く、今回の環頭のような遺物は透過することが難しいため、奈良文化財研究所のもの（株）リガク製工業用X線透過装置 RIGAKU Radioflex 250EGSをお借りして遺物のX線透過試験（出力130kV、5mA、3min）を行った。

分析の結果、特に大きな亀裂等は認められなかった。

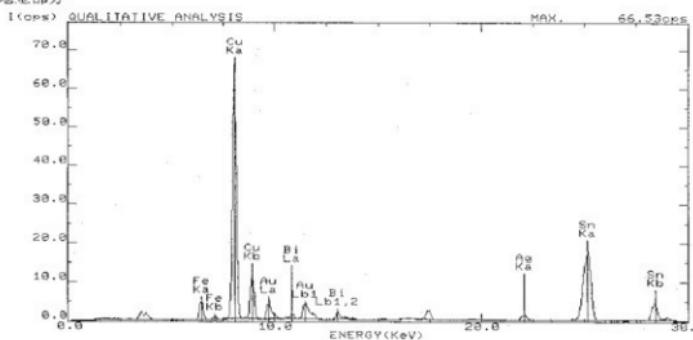
第2節 須恵器器台付着赤色顔料の分析

窟屋1号墳より出土した須恵器器台（56）の鉢部内部の底部に赤色顔料が付着している。顔料は洗浄後確認されたため、土器表面のくほんだ部分に薄く残存しているにすぎない。分析対象となる顔料は土器の凹面の内側に付着しているため、当博物館にある蛍光X線分析装置は物理的に測定が不可能な条件

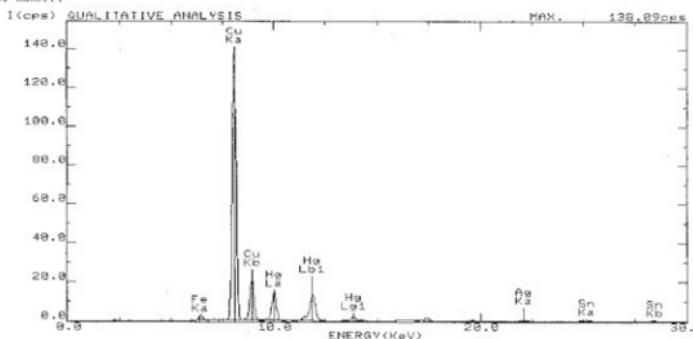
金層部分



地金部分



赤色顔料



第39図 環頭大刀柄頭の蛍光X線定性分析スペクトル

であった。そのため、独立行政法人奈良文化財研究所保存修復科学研究所の高妻洋成室長に分析の指導と助言を依頼し、平成20年11月5日に奈良文化財研究所において高妻室長にレーザーラマン分光分析、脇谷草一郎氏に蛍光X線分析を行っていただいた。

1 レーザーラマン分光分析（第40図）

レーザーラマン分光分析法は、単一の振動数をもつレーザー光を分析試料に当てることで、入射方向と異なる方向に散乱されてくる光を分光器に通すと入射光とは異なる振動数が観測される。この振動数は物質によって固有の値を示すため、物質の定性分析が可能となる分析法である。もし、水銀が含まれていれば微量でもスペクトルが検出される。測定は（株）ラムダビジョン製携帯型マルチレーザーラマン分光分析装置を利用して行った。

分析の結果、水銀朱のラマンスペクトルは検出されなかった。顔料が付着していない部分も測定して両者を比較検討したが、差は認められなかった。

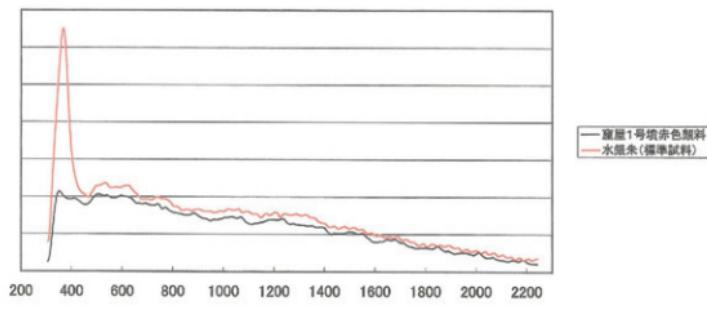
2 萤光X線分析（第41図）

測定は（株）アワーズテックス製携帯型蛍光X線元素分析装置を用いて行った。管電圧40kV、管電流0.5mAで測定した。測定箇所は赤色顔料部分2箇所、胎土部分1箇所である。

測定の結果、赤色顔料部分については鉄、ルビジウム、カルシウム、パラジウム、チタン、マンガンなどが検出され、胎土部分とほぼ変わらない反応であった。

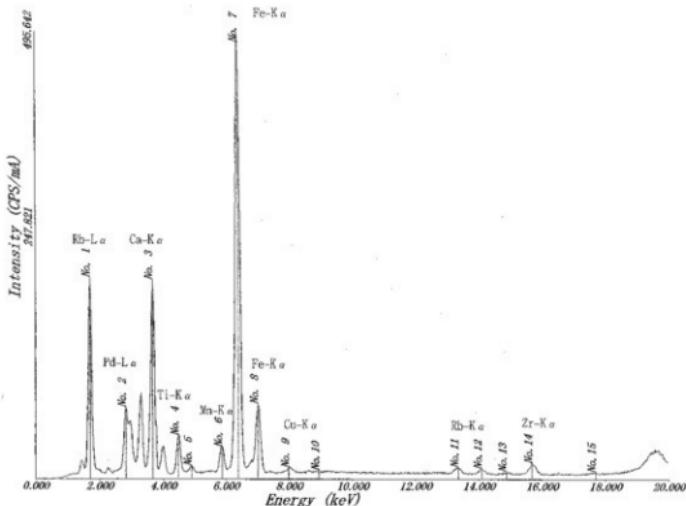
3 分析の結果

レーザーラマン分光分析、蛍光X線分析とも水銀朱は検出されず、鉄の反応が確認された。鉄は土器の胎土中にも含まれるものであることから、顔料由来の反応であるかは判別できない。以上の結果、強いていうなら鉄系の顔料であるベンガラの可能性が考えられる。

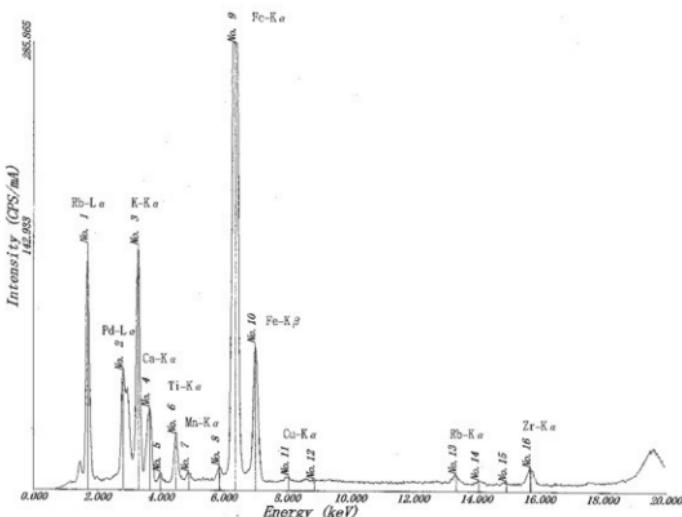


第40図 須恵器付着赤色顔料のラマンスペクトル

赤色顔料部分



胎土部分



第41図 須恵器付着赤色顔料の蛍光X線定性分析スペクトル

第5章　まとめ

第1節　古墳時期と周辺の古墳

窟屋1号墳周辺では前後する時期の古墳の調査がいくつか行われている。窟屋1号墳に先行するものとしては志染の野々池古墳群や久留美の大池7号墳などの報告がなされ、後続する古墳については窟屋崩ノ坂古墳、久留美丈ノ越古墳、久留美上野ノ下古墳などの横穴式石室墳などが調査されている（三木市教育委員会2000）。ここではこれらの古墳出土の須恵器から時期的な前後関係を整理しておく。

須恵器の変遷

まず、窟屋1号墳に先行するものとしては野々池古墳群や大池7号墳などの木棺直葬出土の須恵器を挙げができるが、ここでは同じ志染に位置する野々池9号墳について取り上げる（三木市教育委員会1970）。野々池9号墳では時期の異なる3基の主体部が検出されている。

野々池9号墳第2主体では、杯蓋は稜をもち、口縁部内面に稜を有する。口径は14.6～14.5cmである。杯身は口縁部端部に面をもつものともたないものがある。口径は12.5～12.4cmのものと10.2cmのものがある。MT15型式と考えられる。

野々池9号墳第1主体では、杯蓋には凹線状の稜の痕跡をもつものともたないものがある。口縁端部内面に面をもっている。口径は15.0～14.3cmである。杯身は口縁端部に面をもたない。口径は13.6～12.3cmである。MT85型式と考えられる。

野々池9号墳第3主体では、杯蓋には稜の痕跡をもたない。口縁端部内面に面をもっている。口径は15.5～14.5cmである。杯身は口縁端部に面をもたない。口径は13.6～12.0cmである。TK43型式と考えられる。

窟屋1号墳I群では、杯蓋には稜の痕跡をもたない。口縁端部内面に面をもっているものが多い。口径は16.6～14.95cmである。杯身は口縁端部に面をもたない。口径は14.55～13.5cmである。口径は野々池9号墳第3主体より大きく、最大となる。TK43型式と考えられる。

窟屋1号墳I群に後続する須恵器の良好な資料の報告例はない。三木市教育委員会調査の横穴式石室墳の資料について実見した範囲で触れておく。

窟屋崩ノ坂古墳出土では、杯蓋の口径が15.5～13.9cm、杯身の口径が13.3～12.4cmで、明らかに窟屋1号墳I群より小さい。杯蓋の口縁部内面には面の痕跡は認められない。TK209型式で、永井編年Ⅱ期4A・B小期と考えられる（永井1995）。

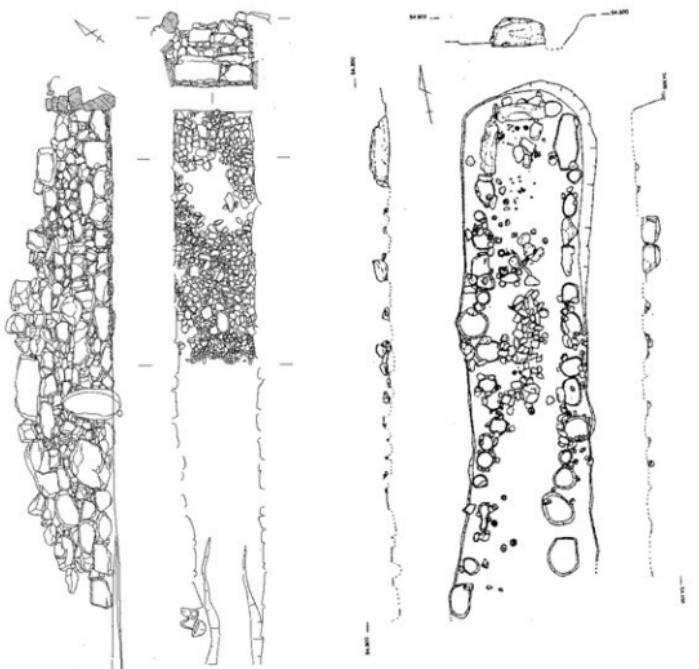
久留美丈ノ越古墳では、杯蓋の口径が14.2～13.4cmで、杯身の口径が13.5～11.5cmである。杯蓋・杯身ともに半数前後がヘラ切り未調整のものである。また、宝珠つまみをもつ杯G蓋や杯Gも出土している。蓋杯についてはTK217型式で、永井編年Ⅱ期4C・5A小期と考えられる。

窟屋1号墳II群の土器は杯蓋の口径が13.2～12.35cmで、杯身の口径が12.6～11.8cmである。ヘラ切り未調整のものが多い。TK217型式で、永井編年Ⅱ期5A・5B小期と考えられる。

久留美上野ノ下古墳では、杯身の口径が9.5～10.5cm程度で、宝珠つまみをもつ蓋が出土している。TK217型式で、永井編年Ⅱ期5B・5C小期と考えられる。

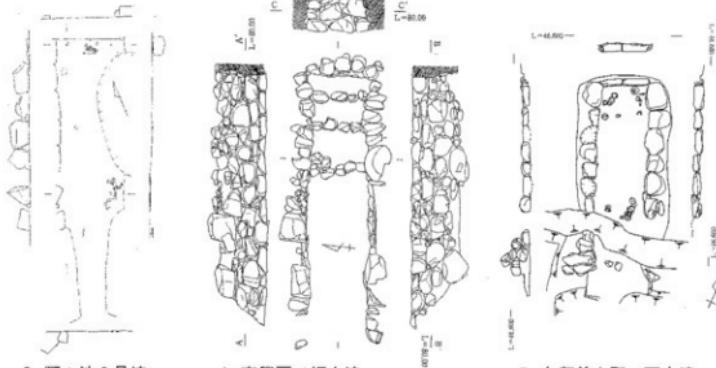
古墳の様相

野々池古墳群や大池古墳群などからみて木棺直葬墳はTK43型式まで収束している。なかでも、野々



1 窓屋1号墳

2 久留美丈ノ越古墳



3 野々池3号墳

4 窓屋扇ノ坂古墳

5 久留美上野ノ下古墳

縮尺 1/100

第42図 志染周辺の横穴式石室

池古墳群は古田集落の南側の丘陵に深く切れ込む谷の最深部に位置し、かつて20数基の古墳が存在していたとされている。このうち7号墳は周溝から出土した須恵器からみると5世紀後葉頃と考えられる全長20m程度の前方後円墳であり、当地域の最も有力な古墳であると考えられる。

これらの古墳群に後続して6世紀後葉に窟屋1号墳が現れる。野々池3号墳が木棺直葬墳に直続するといえば古い可能性はあるが、窟屋1号墳が三木市内において横穴式石室導入初期の古墳であることが明らかである。それに後続して6世紀末に窟屋扇ノ坂古墳が現れ、窟屋1号墳では7世紀前葉頃にⅡ群須恵器の追葬が行われている。窟屋1号墳は周囲が耕地化されてしまっているため、単独墳であったかどうかはよく分からないが、窟屋扇ノ坂古墳、久留美丈ノ越古墳、久留美上野ノ下古墳なども窟屋1号墳と同様に段丘縁辺に単独で見つかっていることからすると、比較的散漫に存在していた可能性が高いであろう。

窟屋1号墳の横穴式石室の規模は全長10.85m、奥壁幅1.6mである。石室全長からみると加古川流域では池尻15号墳、志方二子塚古墳、東山古墳群などに次ぐ有数の大型石室である（岸本2006）。ただし、幅は1.6mと狭く、三木市西部の正法寺1号墳（奥壁幅2.2m）に遠く及ばない。久留美丈ノ越古墳（全長約10m、奥壁幅1.5m）もほぼこれに等しい大きさであり、石室規模からみると地域内にある有力な古墳の1つということができる。

第2節 金銅装单鳳環頭大刀について

金銅装单鳳環頭大刀は柄頭（M1）、鞘飾金具（M2・3）が出土しており、M4～6がこの大刀の本体である可能性がある。大刀本体が玄室中央の盗掘部と玄室前部、鞘飾金具が玄室前部、柄頭と茎は墓道上層から出土している。他の遺物と比べるとかなり散乱して出土していることから、大刀は激しく盗掘を受けた玄室中央の木棺内に置かれていた可能性が高いものと思われる。上記のように盗掘を受けたため残存する装具は残念ながら柄頭と鞘飾金具のみである。したがって、柄頭を主として検討することにする。

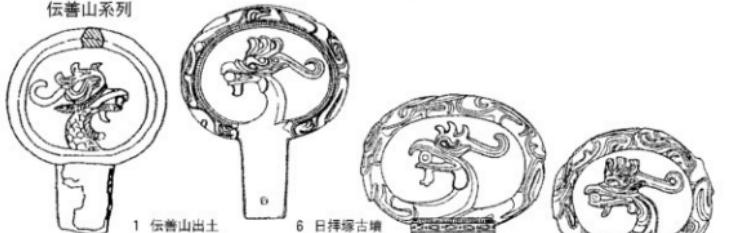
柄頭は金銅製单鳳環頭大刀柄頭である。環内は横を向いた1羽の鳳凰が嘴に玉を噛むタイプのもので、環部には龍が表現されている。鳳凰・龍とも体表にはリ字形の工具によって打刻して、羽毛・鱗が表現されている。单龍单鳳環頭大刀については新納泉により編年が行われており、それによると環内の鳳凰の頭部については目の後方にある孔がなく、玉を噛んでいることからIV式に属するものと考えられる（新納1982）。環部の龍文についてもIV式の様式資料である平地1号墳よりも単純化されてはいるものの、龍の頭部はかろうじて侧面観を保持していることからIV式に該当するものである。

单龍单鳳環頭大刀はこれまでに国内を中心に数多く出土し、「船載品またはそれに近い作品をモデルにし、そのコピーを反復することによって製作された把頭のいくつかの組の「系列」にまとめられる」とされ（穴沢・馬目1986）、穴沢味光・馬目順一氏や大谷見氏（大谷2006）などによって複数の系列に分けられている。これらの研究を参考にしながら、窟屋1号墳出土の单鳳環頭大刀柄頭について含玉单鳳環頭大刀の中での位置づけを考えてみたい（第43図）。

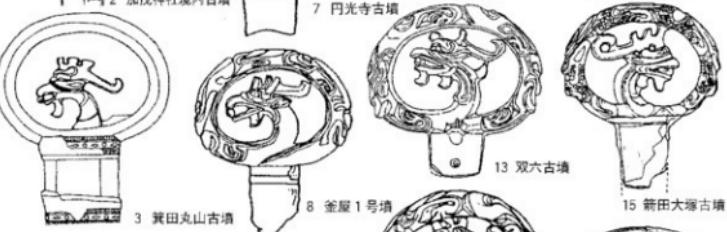
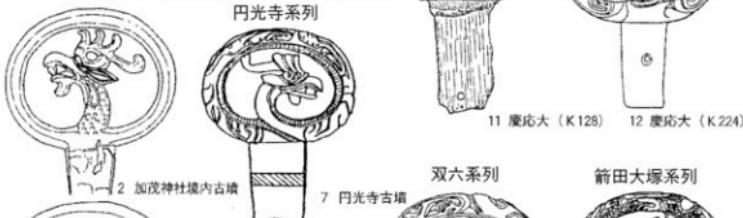
環内の鳳凰

单鳳環頭大刀は環部の鳳凰が大きく含玉のものと非含玉の系列に分かれ（穴沢・馬目1986）、この差が新納氏のIV型式までとV型式以降の区分とされている。含玉单鳳環頭大刀は環部文様をもつものがほ

伝善山系列



円光寺系列



双六系列



13 双六古墳



15 箭田大塚古墳

特異な環部文様
のもの



上栗田系列



18 天理参考館

井出二ツ塚系列



17 井出二ツ塚古墳

10 富屋1号墳

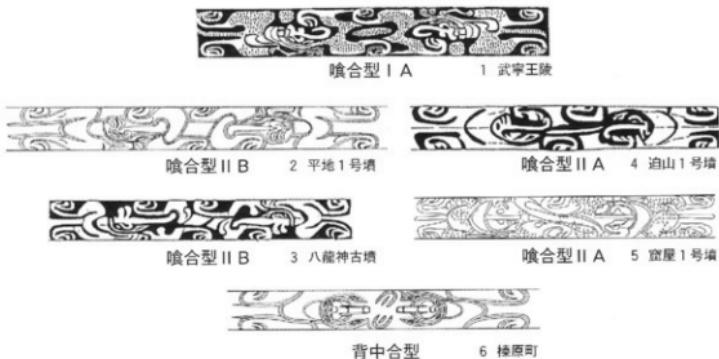


5 鶴ノ湯病院跡横穴



10 富屋1号墳

第43図 含玉半鳳環頭大刀柄頭の比較



第42・43回の図出典 42-1・7 : 新谷1977 42-2・9・16・18、43-3・4 : 大谷2006 42-3・13 : 許斐2007
 42-4 : 静岡県教育委員会1971 42-5 : 大谷・松尾2004 42-6・11・12、43-1・2・6 : 新納1982
 42-14・15 : 畠原・中野・宇垣1986 42-17 : 井鍋2006

第44図 環部龍文の比較

とんどであるが、環部に文様をもたないものもわずかに存在する。

伝善山系列 環部に文様をもたず、環部の断面が多角形を呈している。伝善山例（1）・加茂神社境内古墳例（2）は環内の鳳凰は角と冠毛が直角状に、頸部には羽毛が表現されている。箕田丸山古墳例（3）は1・2に比べると環内の鳳凰は簡略化されている。環部の断面が多角形を呈していることは新羅地域に多い三葉環頭の環部に類似し、Ⅱ～Ⅲ式の時期のものと考えられている（持田2007）。

円光寺系列 環内の鳳凰の耳が後方へ突出し、角と引っ付いていない。頸部は喉元付近から垂れ下がっている。いずれもⅣ式の時期のものと考えられるものである。円光寺古墳例（7）はⅢ式の日拝塚古墳例（6）のように環部内縁に珠文があるものをモデルとしたものと考えられる。窟屋1号墳例（8）では珠文がなくなり筋だけになっている。八龍神古墳例（9）・窟屋1号墳例（10）では鳳凰の頭の付け根の斜めの筋のみとなっている。八龍神古墳例（9）・窟屋1号墳例（10）では鳳凰の頭をもち、羽毛・鱗文が表現されていることがやや特異である。

双六系列 肩から耳が目を取り巻いてU字形に表現されている。耳の先端は上方に反り、角に引っ付いている。頸部は肩先端と喉元の2箇所に垂れ下がっている。角の先端はやや強く巻いている。頭毛、背びれ状の突起をもっている。Ⅲ式の慶應大（K128）例が眉・耳・角の表現からするとモデルの可能性がある。

箭田大塚系列 目の後方に小孔をもち、耳の先端は反りあがり、角と引っ付いている。角の先端は強く巻いている。頸部は肩先端と喉元の2箇所にもち、喉元のものは頸部に接合している。長い頭毛をもっている。羽毛・鱗文が表現されている。Ⅲ式の慶應大（K224）例が目の後方の小孔・角の強い巻き・長い頭毛などの表現からするとモデルである可能性がある。

上栗田系列 箭田大塚系列とはほぼ同じであるが、頸毛をもたず、双六系列と同じような背びれ状の突起をもっている。

井出二ツ塚系列 頸部は喉元で突起状に膨らむようであり、頭毛をもつ。環部の龍文は他の含玉单鳳とは異なり背中合型である。嘴に玉を噛む以外はV式の龍王山系列のものとほとんど変わらない。

環部龍文

環部の文様については穴沢・馬目氏（穴沢・馬目1976）や大谷氏（大谷2006）によって分類が行われている。大谷氏は喰合型を龍の足首の向きと足首と角の位置関係で分類を行っている。龍の頭上の足首が内側に向くものをA、龍の頭上の足首が外側に向くものをB、足首が角の上部にかぶさるものI、角の中に足首が納まるものをIIとしている。窟屋1号墳についてみれば、喰合型II Aに該当する。喰合型II Aの環部文様をもつものは東本郷系列（新納V式）があるくらいで、単龍環頭のものでは北牧野2号墳（新納II式）、株原系列・様式（新納III・IV式）のものがある。含玉単鳳環頭の環部龍文は日拝塚古墳・円光寺系列、箭田大塚系列、上栗田系列など喰合型II Bをとるものが多いようである。窟屋1号墳例は中央の島状の部分がなくなり、両方の龍の頭上の足が一続きとなっている点は他例にみられない特徴である。

鞘飾金具

窟屋1号墳出土の鞘飾金具（M2・3）は長方形の透かしをもつもので、類例は大阪府海北塚古墳例（単龍環頭）、三重県西野5号墳例（飾金具のみ）、福岡県釣崎3号墳例（単龍環頭）などと少ない。海北塚古墳例、西野5号墳例、釣崎3号墳例は透かしの両脇と上下に連子状の文様が入れられているが、窟屋1号墳例は透かしの両脇のみである。留穴の配置はそれぞれ異なり、海北塚古墳例では透かし間の両脇全て、西野5号墳例では透かし間の両脇1つ置き、窟屋1号墳例では透かし間の両脇1つ置きに交互となっており、釣崎3号墳例では透かし間の中央に3つ縱に並んでいる。窟屋1号墳出土例は鞘飾金具の文様からみてもやや後出的なものと考えられる。

小結

窟屋1号墳例は壇内の鳳凰からみると耳が後方に大きく膨らむ円光寺系列に属するが、長い頸毛をもち、羽毛・鱗文が表現されている点では箭田大塚系列の特徴も取り入れられている。環部龍文の文様や鞘飾金具からみると単鳳環頭大刀の中では傍系に属している。環部龍文の退化や鞘飾金具の文様からみて新納IV式のなかでも後出的なもので新納氏の年代に従えば560年墳のものと考えられる（新納1987）。

第3節 馬具について

轡、鞍、鏡、銅留金具、貝製飾金具などが出土しており、馬装の1セットが備わっている。轡は素環鏡板付轡（M35）で、格の高いものではないが貝製飾金具は金銅装の可能性があり、若干の装飾性はもっている。

鞍は鞍金具（M36~40）と縁金具の可能性のある破片（M49）がある。鞍金具の輪金（M36~39）は4点出土しており、通常は後輪に2つつけるのが一般的であることから、2個体存在する可能性があるが、他の馬具は1セットしか出土していないことから、前輪・後輪ともに鞍金具をもつものであったかもしれない。座金具は中央部が半球状にふくらみ、周囲は5弁花形である。

出土した馬具の中で最も目を引くのが貝製飾金具（M47・48）である。いずれも座金具の下面に渦巻き状の貝の痕跡が残っており、他の良好な出土例からイモガイの螺頭部を台座としていたと考えられるものである（大久保1995に同様な残存例の詳しい分析がある）。座金具は円形と花弁形のものがある。座金具が円形のものは福岡県八女郡広川町大塚1号墳出土例のものが、鉄地金銅張りで類似する。座金具が花弁形のものは、花弁が7弁のものや球形の鏡頭に上星の輪状の縁が付いているものは類例がみら

れない。

貝製雲珠・辻金具は朝鮮半島において5世紀後半から6世紀前半に用いられ、その系譜を引いて日本においては貝製雲珠・辻金具がTK10型式～TK209型式の時期に用いられている。貝製飾金具は両繫の辻金具として使われたと考えられるもので（宮代1996）、やや遅れてTK43型式～TK217型式に用いられている（宮代1989）。

このような貝製飾金具は近畿地方での出土は珍しく、本例以外には西宮市五ヶ山1号墳、京都府京丹後市湯船2号墳ぐらいしかなく、関東・九州地方に多く見られるものである（宮代1989・大久保1995）。

貝製雲珠飾金具を伴う馬具のセッ

トは環状鏡板付脛・三角錐形木芯鉄板張並鎧一貝製雲珠飾金具一鉄具・飾金具というセットが圧倒的で、鉄地金銅號の馬具よりも1段下のランクとして位置づけられている（宮代1989）。



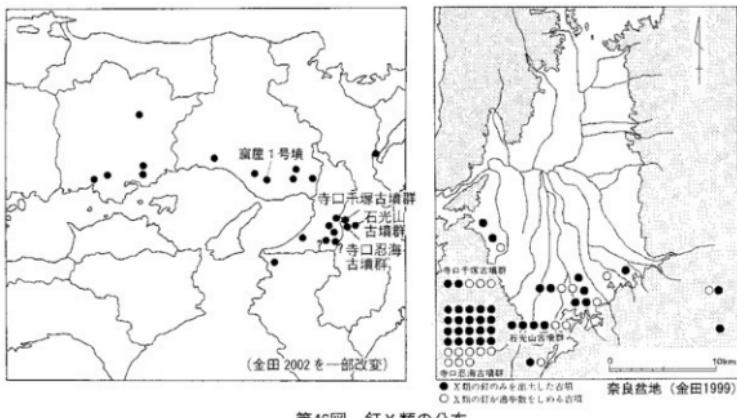
第45図 貝製飾金具の分布
大久保1995に加筆

第4節 鉄釘について

玄室内からは鉄釘が出土しているが、鉄釘は播磨地域内においてには窟屋1号墳を含めて14古墳群、28基の古墳から出土している（第3表）。「近畿の横穴式石室資料集成」の播磨の項目（横穴式石室研究会2007）に記載されている古墳数が約500基（うち遺物の記載があるもの約300基）であることからすると鉄釘出土古墳は5～10%の割合であり、鉄釘を使用した木棺が採用されているのは少数派であることがわかる。6世紀前半までの出土例は非常に少なく、6世紀後半頃よりやや増え始め、7世紀には多くなり、特定の群集境内での採用が認められる。

鉄釘の長さは残りのよいもので19cmと長く、播磨地域では最長である。鉄釘の長さを大・中・小に分けた内、大きい部類（金田2003のI類）に属するものである。I類鉄釘の使われた木棺の大きさは良好な検出例から長さ約2m、幅0.5～0.8mとされている。また、釘に付着した木質の幅から側板の厚さが8cm程度と厚いものであったことが分かる。

鉄釘の頭部は2方向に引き延ばされて作りだされたもの（金田2003のB-1類）である。金田氏はX類（B-1・B-2類を合わせたもの）の分布を検討した結果を次のようにまとめている（金田1999）。①鉄釘X類は畿内地方、特に大和盆地南西部において多く出土している。②畿内地方以外では主に吉備地方、近江地方で出土しているが、大和地方に比べて少数であり、長期にわたって利用されている例は



第46図 鉄釘X類の分布

ない。③鉄釘X類を出土する古墳は、いずれも20m前後、あるいはそれ以下の中小規模の古墳であり、鉄釘X類はその地域のいわゆる中・小首長層を中心に使用されていたと考えられる。

③の特徴については窯屋1号墳に当てはまり、②の特徴については鉄釘X類のみならず、播磨においては鉄釘そのものの使用が少數である。そして①の特徴については窯屋1号墳の被葬者を考える上で非常に大きな意味をもっていると思われる。鉄釘X類が大和盆地南西部を中心としている割であるが、その中でも圧倒的に出土数が多いのが寺口忍海古墳群、寺口千塚古墳群など葛城北部の古墳である。葛城北部には忍海地域がこの分布の中心として含まれている。忍海地域には『日本書紀』神功5年条に葛城襲津彦が連れ帰った新羅の俘囚を高宮・桑原・忍海・佐麻の四邑に住まわせたという記事があり、このうち忍海邑については鍛冶遺跡の脇田遺跡（奈良県葛城市）や鍛冶工具・鉄滓が副葬された寺口忍海古墳群などの存在が関連するものとされ（花田1989、坂1998）、忍海地域は渡米系工人の有力な居住地のひとつと考えられている。

窯屋1号墳出土の鉄釘が奈良盆地西南部の忍海地域と関連が深いとすると『日本書紀』に志染地域の在地有力者として「忍海部造」が記載されていることは偶然とは思えない。

第5節 「オケ・ヲケ伝承」と窯屋1号墳

「オケ・ヲケ伝承」と忍海部造

志染地域はいわゆる「オケ・ヲケ伝承」の舞台とされている。後に顯宗・仁賢天皇となる弘計王子・億計王子は父の市辺押磐皇子（履中天皇の長子）を雄略天皇に殺害したことにより、丹後を経て播磨に逃れていたところを志染で発見され、顯宗天皇・仁賢天皇の順に即位したというものである。二王子が隠れ住んだという「志染の石室」の伝承地が存在することは有名であり（中村1926）、窯屋1号墳が所在する窯屋地区は、江戸時代には池野村と呼称され、王子の宮が置かれた「池野」の通称地でもある。この「オケ・ヲケ伝承」の実否や顯宗・仁天皇の実在については議論のあるところである。実否はとも

第3表 播磨の鉄釘出土古墳

番号	遺跡名	旧郡名	所在地	墳形(規模)	主体部型式	釘の分類	時期	文献
1	池尻 2 号墳	印古郡	加古川市	円 (11.1×6.45)	溝穴式石室	A	TK73	1
2	窟屋 1 号墳	美嚢郡	三木市		横穴式石室	B-1	TK43	2
3	勝手野 4 号墳	貴茂郡	小野市	円 (12)	横穴式石室	A	飛鳥Ⅱ	3
4	勝手野 6 号墳	貴茂郡	小野市	円 (10)	横穴式石室	A	飛鳥Ⅱ	3
5	勝手野 7 号墳	貴茂郡	小野市	円 (9.5)	横穴式石室	A, B-1	TK209	3
6	状観山104号墳	貴茂郡	加西市	円 (9~10)	横穴式石室	A	MT85	4
7	状観山5号墳	貴茂郡	加西市	円 (7)	横穴式石室	A	飛鳥Ⅳ	4
8	上三島 5 号墳	貴茂郡	加東市(旧社町)	円 (11)	横穴式石室		TK209	5
9	村家山古墳	多可郡	多可郡多可町(旧中町)		横穴式石室	A	飛鳥Ⅳ	6
10	入角70号墳	多可郡	多可郡多可町(旧中町)	円 (11.5×10.2)	横穴式石室			7
11	入角95号墳	多可郡	多可郡多可町(旧中町)	円 (9×9)	横穴式石室		飛鳥Ⅳ	7
12	入角103号墳	多可郡	多可郡多可町(旧中町)	方墳 (18.5×16.5)	横穴式石室		飛鳥Ⅳ	7
13	川上 2 号墳	神崎郡	神崎郡市川町	円 (13)	横穴式石室		TK209	8
14	季田 17 号墳	揖保郡	たつの市(旧揖保川町)	円 (8)	横穴式石室		TK217	9
15	俊尻浅谷 1 号墳	揖保郡	たつの市(旧揖保川町)		横穴式石室	B-4?	TK217	10
16	轟子山 12 号墳	揖保郡	たつの市(旧龍野市)	円 (10脚)	横穴式石室	B-1	TK217	11
17	西宮山古墳	揖保郡	たつの市(旧龍野市)		横穴式石室	A	MT15	12
18	西脇 A - 26号墳	揖保郡	姫路市		横穴式石室	A	TK217	13
19	西脇 A - 28号墳	揖保郡	姫路市	円 (6.4)	横穴式石室	A	TK217	13
20	西脇 A - 29号墳	揖保郡	姫路市	円 (7.7)	横穴式石室	A	TK217	13
21	西脇 A - 40号墳	揖保郡	姫路市		横穴式石室			13
22	西脇 A - 43号墳	揖保郡	姫路市	円 (5.8)	横穴式石室	A		13
23	西脇 A - 17号墳	揖保郡	姫路市		横穴式石室	A	TK217	13
24	西脇 C - 11号墳	揖保郡	姫路市	円 (4.9)	小彫穴式石室	A	TK217?	13
25	西脇 C - 55号墳	揖保郡	姫路市	円 (8.4?)	横穴式石室	A	TK217	13
26	西脇 D - 92号墳	揖保郡	姫路市	円 (5.8)	横穴式石室	A		13
27	西脇 E - 99号墳	揖保郡	姫路市	円 (9.7)	横穴式石室	A		13
28	小丸第 2 号墳	赤穂郡	洲本市	円 (10)	横穴式石室		TK43	14

釘の分類は金田2003による

A類：底部を直角に折り曲げるもの。

B類：頭部を作り出すタイプ。

B-1類：頭部の両側を 2 方向に延ばして頭部を作り出すもの。

B-2類：頭部の周囲が 4 方向に張り出するもの。

B-3類：頭部がどのように大きく、薄く張り出するもの。

B-4類：頭部を紙のように作り出すもの。

文献

- 1 加古川市教育委員会1965『印南野(加古川工業用水ダム古墳群発掘調査報告その1)』加古川市文化財調査報告3
 - 2 本著
 - 3 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査室事務所 2002『勝手野古墳群－勝手野遺跡－藤手野古墳群－藤手野麻績跡－』兵庫県文化財調査報告書第239号
 - 4 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2006『加古南業兼塚盆地内遺跡調査報告書』兵庫県文化財調査報告第302号
 - 5 加東郡教育委員会1993「4. 上二草古墳群7・8・9号墳」『埋蔵文化財調査年報(1990年度)』
 - 6 小町教育委員会1992「村東山古墳群7・8号墳」『兵庫県多可町中町』中町文化財報告1
 - 7 神崎恵士 2008年刊行予定『西脇群古墳群発掘調査報告書』妙見山墓道調査企画
 - 8 市川町史編纂会 2005『市川町史 史料編』吉川町
 - 9 揖保川町教育委員会2000『山津屋・垂田・原一山遺跡原山・原根遺跡に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』揖保川町文化財報告書Ⅴ
 - 10 揖保川町教育委員会1978『俊尻浅谷古墳』揖保川町文化財調査報告書1
 - 11 兵庫県教育委員会1987『鹿子向4号・山陽白動車道付近埋蔵文化財発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告 第61号
 - 12 八戸官署1982『西宮山古墳出土物』『京都宣土博物館蔵 富雄山古墳・西宮山古墳出土物』京都同立博物館
 - 13 兵庫県教育委員会1995『姫路市所西脇古墳群-山陰自始道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XV』兵庫県文化財調査報告書 第141号
 - 14 小丸古墳群調査会1985『兵庫県相生市牛瀬字小丸 小丸古墳群』
- ※本表作成に当たっては横穴式石室研究会2007『近畿の横穴式石室』の集成表を利用した。

かく説話が設定されている年代は5世紀後葉頃のことであり、年代的に6世紀後葉の窟屋1号墳と直接関係するわけではない。

この伝承において二王子は在地有力者のもとで身を隠していたのであるが、その在地有力者は『風土記』では「志染村首伊等尾」、「古事記」では「志自牟」、「日本書記」では「赤石郡縮見毛倉首忍海部造綱目」とそれぞれ表記されている。「伊等尾(いとみ)」は「細目(いとめ)」に通じ、「志自牟(じじむ)」は「縮見(しじみ)」に通じるとみられることから、表記は異なっているものの同一人物を示している

ものと理解されている。忍海部造とは開化天皇の皇別氏族で、忍海角刺官（奈良県葛城市忍海に比定）に宮居したとされる飯豊青皇女（別名忍海部女王・忍海郎女）の名代の部とされている（坂本・平野1990、小林1994）。飯豊青皇女は二王子の叔母もしくは姉で、清寧天皇と顯宗天皇の間に即位したとされる人物である。忍海部造が名代部とすれば二王子とは縁のある氏族といえることができる。ただし、伴部の成立（制度化）はそのもとになったものが5世紀代にあったとしても6世紀に下るとされている点ではやや問題もある。

忍海を冠する氏族には後に忍海村主・忍海手人・忍海漢人・忍海首などがある。忍海村主は『坂上系図』所引『新撰姓氏錄』逸文にみえる阿知使主の本郷の住民で、仁徳朝に渡來したものの子孫を称する30氏の村主のひとつで、葛城製津彦によって四邑に住まわされた新羅の俘囚（『日本書紀』神功5年条）に含まれる他の高宮・桑原・佐麻の地名を冠する村主もみられる。忍海手人・忍海漢人・忍海首などは7・8世紀の史料中に金工に従事する雜工部として見える。これらの氏族は葛城氏配下の渡來系工人で、葛城氏滅亡後は東漢氏の配下とされたとされている（加藤1994）。忍海部も忍海漢人と並んで雜工部に編入されていたことを示す史料（『続日本紀』養老6年3月辛亥条）があることから金工に従事した場合があり、忍海部氏を金工に問わる氏族とする見方も存在している。

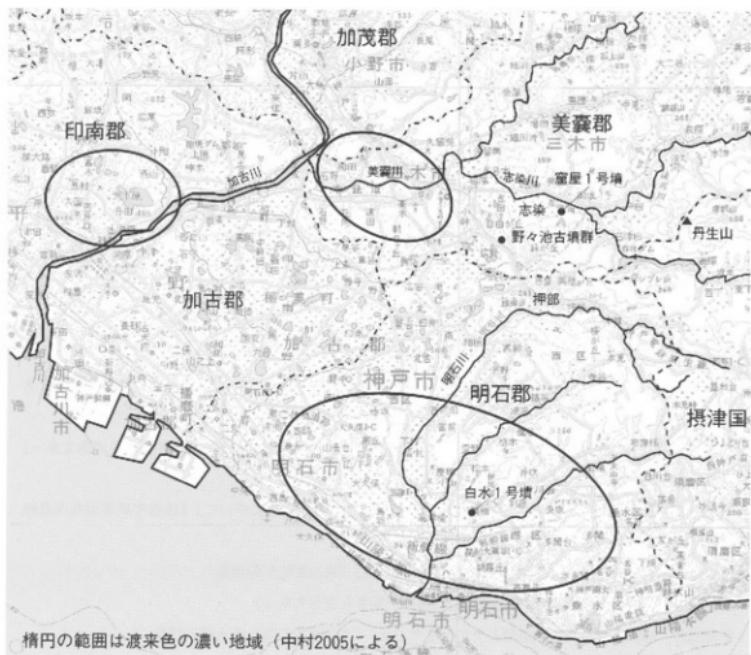
忍海部造細目が管理したという「縮見屯倉」についてはこの部分にその名が伝わるのみで実体はよく分からぬ。その記載されている年代からすればいわゆる「前期ミヤケ」に属するもので、5世紀代に実在したかを判別することは難しい（鶴野1994）。

「オケ・ヲケ伝承」は繼体・欽明天皇及びその子孫に於ては仁賢天皇の娘手白香皇女（繼体后妃、欽明母）を通じて母系からの大平位繼承の正当性を示すために欠くべからざる重要な部分であり、6世紀以降の知識をもって複雑に構成されていることから、その個々の具体的な内容の解釈については難しい点を多く伴っている。

窟屋1号墳の被葬者と「オケ・ヲケ伝承」

窟屋1号墳の所在する志染地域は、加古川支流域の内陸部に位置している（第47図）。より加古川本流に近い美濃郡西部の地域では前期の前方後円墳と考えられている愛宕山古墳や中期の短甲の出土した年ノ神6号墳などの有力な古墳が存在し、韓式系土器の出土も見られる。6・7世紀には鉄生産に関わる遺物の出土がみられ、『続日本紀』延暦8年12月条に現れる「美濃郡大領」の「韓鐵治首広富」につながる可能性がある。志染地域は、美濃郡に属しているが、『日本書紀』の記述によると「縮見屯倉」が「赤石郡」に属していると認識されることから明石川流域の勢力によって開発が行われたことが考えられる。志染地域に南接する明石郡側の押部は「忍海部」の転訛と考えられており、明石川上流部から北へ丘陵を超えて志染地域までが忍海部氏の勢力下にあった可能性を示している。明石川の下流部には前期の白水瓢塚古墳や中期の玉津大塚古墳などの有力な古墳が存在し、中・後期には中期の出合遺跡や後期の寒風遺跡など渡來系の遺構や遺物が検出される遺跡が比較的多く見つかっている。装飾大刀の保有という点では加耶系の龍鳳環頭大刀が出土したと考えられる白水1号墳の存在も注目される（岡本2008、町田1987・1997）。このように志染地域はわずかに小規模な前方後円墳である野々池7号墳が存在するものの、美濃郡西部や明石川下流部のような5世紀代までに有力な首長のもとで渡來系の技術などを導入して開発された地域に比べると後背に位置しているということができる。

調査の結果、窟屋1号墳は6世紀後半の横穴式石室墳であることが明らかとなった。墳丘・石室の規模や遺物の面でも金銅装の馬具より1ランク下がる馬装をもっていることからも、いわゆる同造クラス



第47図 窟屋1号墳とその周辺

よりは1段ランクの下がるものということができる。

しかしながら、窟屋1号墳の出土品のなかには金銅装單鳳環頭大刀・貝製飾金具・鉄釘など他の古墳ではあまり出土の見られないものが存在する。特に窟屋1号墳の初装時の木棺に使用されている鉄釘の型式は、前節で示したように奈良県の忍海部地との深い関係を示すもので、6世紀段階において『日本書紀』に見える忍海部造が存在したことを証拠づけるものと評価できる。金銅装單鳳環頭大刀の保有について、松尾充晶氏が1段階（TK43型式）の「単龍鳳環頭大刀が濃密に分布する地域は、既成の伝統的首長権が存在しないか、存在してもそれほど安定して卓越しない地域、または既成の伝統的地域首長権の「弱体化に成功した」地域であり、王権による直接的・一元的な直属関係にある地域である。」と評価している（松尾2005）ことが「縮見屯倉」が存在したとされる窟屋1号墳の状況に一致すると言えよう。貝製飾金具については九州と関東にのみ集中して分布するもので、具体的にその背景はうかがい知れないが被葬者の特殊な性格を示すものであろう。

窟屋1号墳の調査によって6世紀後葉には『日本書紀』に記載される「忍海部造」が存在したことが強く示され、「縮見屯倉」の存在もある程度肯定される。少なくとも「オケ・ワケ伝承」の設定の一部は実在したことを示している。ただし「オケ・ワケ伝承」 자체は5世紀後葉を舞台としたもので、この伝承は王権の継承や動搖を示す内容を含んでいる。この内容の実在の問題は非常に重要であり、窟屋1号墳を巡る時期の古墳時代の当地域の様相については、今後とも注視が必要であろう。

参考文献

- 穴沢味光・馬日順一 1986 「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布」『月刊考古学ジャーナル』266号
- 井鍋譽之 2006 「東駿河」「東海の馬具と飾り大刀」東海古墳文化研究会
- 大久保奈奈 1995 「イモガイと飾り鉄」『古代探査IV』
- 大谷晃二 2006 「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2004年度共同研究成果報告書』
- 大谷晃二・松尾充晶 2004 「島根県 装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧（改訂版）」『島根考古学会誌』第20・21集合併号
- 岡本一秀 2008 「伝置塚出土環頭の由来」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第1号
- 加藤謙吉 1988 「渡来の人びと」『古代を考える 雄略天皇とその時代』
- 金田善敬 1999 「古墳時代後期の鉄釘にみられる地域間交流」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』
- 金田善敬 2002 「四山市模岸古墳出土の二種類の鉄釘」『環濠戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』
- 金田善敬 2003 「古墳時代の鉄釘」『考古資料大觀』第7巻
- 岸本一宏 2006 「まとめ－加古川流域における後半期の横穴式石室について」『加西南産業団地内遺跡調査報告書』兵庫県文化財調査報告第302冊
- 葛原克人・中野雅美・宇垣匡雅 1986 「箭田大塚古墳」『岡山県史』第18巻
- 許斐麻衣 2007 「九州の装飾付大刀集成」『福岡大学考古資料集成1』
- 小林敏男 1994 「忍海氏・忍海部とヲケ・オケ二王」『古代王權と県・県主制の研究』
- 是川 長 1970 「考古学上からみた三木地方の古代」『三木市史』
- 坂本太郎・平野邦雄 1990 「日本古代氏族人名辞典」
- 静岡県教育委員会 1971 「掛川市字洞ヶ谷横穴発掘調査報告」
- 新谷武夫 1977 「環頭柄頭研究序説」『考古論集－慶祝松崎寿と先生六十三歳記念論集』
- 船野和己 2004 「ヤマト王權の列島支配」『日本史講座1 東アジアにおける国家の形成』
- 永井信弘 1995 「播磨における古墳時代須恵器の変遷」『小谷遺跡（第6次）』加西市教育委員会
- 中村直勝 1926 「弘計・億計二王隠棲伝説地」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯
- 中村 弘 2005 「東播磨の渡来系文物」『渡来系文物からみた古墳時代の播磨』
- 新納 泉 1982 「單竜・單鳳環頭大刀の編年」『史林』65巻4号
- 新納 泉 1983 「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30卷第3号
- 新納 泉 1987 「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34卷第3号
- 新納 泉 2001 「空間分析から見た古墳時代社会の地域構造」『考古学研究』第48卷第3号
- 花田勝弘 1989 「倭政權と鐵治工房」『考古学研究』第36卷第3号
- 坂 靖 1998 「古墳時代における大和の鐵冶集団」『櫛原考古学研究所論集』第13
- 町田 章 1987 「環頭大刀二事」『古代東アジアの装飾墓』
- 町田 章 1997 「加那の環頭大刀と王權」『加那諸國の王權』
- 松尾充晶 2005 「総括：装飾付大刀と地域社会の首長権構造」『装飾付大刀と後期古墳』島根県古代文化センター調査研究報告書31

- 三木市教育委員会 1970『野々池沢古墳群』
- 三木市教育委員会 1986『三木市埋蔵文化財調査概報－昭和50年度～昭和59年度－』
- 三木市教育委員会 2000『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ－昭和60年度～平成6年度－』
- 三木市教育委員会 2001『三木市遺跡分布地図』
- 宮代栄一 1989「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史学』76号
- 宮代栄一 1996「古墳時代の面繋構造の復元－X字形辻金具はどこにつけられたか」『HOMINID』第1号
- 持田大輔 2007「龍鳳文環頭大刀の日本列島内製作開始時期と系譜」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第52輯第4分冊
- 山尾幸久 1983『日本古代王權形成史論』
- 横穴式石室研究会 2007『近畿の横穴式石室』

付表1 古墳時代土器法量表

番号	器種	器形	造形	層位	L径	器高	底径	その他の法量	備考
1	須恵器	杯蓋	玄室	床面	16.6	4.8		I-1群、火棒あり	
2	須恵器	杯蓋	玄室	床面	16.0	4.25		I-1群、12とセット。火棒あり	
3	須恵器	杯蓋	玄室	床面	15.65	3.9		I-2群、13とセット	
4	須恵器	杯蓋	玄室	床面	15.0	3.7		I-2群	
5	須恵器	杯蓋	玄室	床面	16.45	5.1		I-4群	
6	須恵器	杯蓋	玄室	床面	16.0	4.8		I-4群、16とセット	
7	須恵器	杯蓋	玄室	床面	16.0	4.6		I-4群	
8	須恵器	杯蓋	玄室	床面	16.0	4.5		I-4群	
9	須恵器	杯蓋	玄室	床面	15.8	4.35		I-4群、20とセット	
10	須恵器	杯蓋	玄室	床面	14.95	4.2		I-4群、21とセット	
11	須恵器	杯身	玄室	床面	14.55	4.6		I-1群	
12	須恵器	杯身	玄室	床面	14.45	4.0		I-1群、2とセット	
13	須恵器	杯身	玄室	床面	13.75	4.0		I-2群、3とセット	
14	須恵器	杯身	玄室	床面	13.9	4.5		I-3群	
15	須恵器	杯身	玄室	床面	14.6	4.4		I-4群	
16	須恵器	杯身	玄室	床面	14.55	4.7		I-4群、6とセット	
17	須恵器	杯身	玄室	床面	14.35	4.8		I-4群	
18	須恵器	杯身	玄室	床面	14.2	4.75		I-4群	
19	須恵器	杯身	玄室	床面	14.2	4.6		I-4群	
20	須恵器	杯身	玄室	床面	14.1	4.9		I-4群、9とセット	
21	須恵器	杯身	玄室	床面	13.4	3.9		I-4群、10とセット	
22	須恵器	杯蓋	玄室	床面	13.2	4.4		II-2群	
23	須恵器	杯蓋	便道	埋土	12.75	3.8		II-3群	
24	須恵器	杯蓋	便道	床面	12.35	4.0		II-3群	
25	須恵器	杯蓋	便道	埋土	(12.1)	(3.65)		II-1群	
26	須恵器	杯身	玄室	床面	12.6	3.15		II-2群	
27	須恵器	杯身	便道	埋土	12.35	4.3		II-2群	
28	須恵器	杯身	玄門踏	埋土	11.85	3.3		II-2群	
29	須恵器	杯身	便道	埋土	11.8	3.7		II-3群	
30	須恵器	杯身	玄室	埋土	11.8	3.7		II-3群	
31	須恵器	高杯蓋	玄室	床面	16.75	4.8		35とセット	
32	須恵器	高杯蓋	玄室	床面	16.65	5.3		36とセット	
33	須恵器	高杯蓋	玄室	床面	16.2	5.05		37とセット	
34	須恵器	高杯蓋	玄室	床面	15.8	5.2		38とセット	
35	須恵器	有蓋高杯	玄室	床面	14.45	8.85	11.75	31とセット	
36	須恵器	有蓋高杯	玄室	床面	14.9	9.0	11.8	32とセット	
37	須恵器	有蓋高杯	玄室	床面	14.65	8.35	11.7	33とセット	
38	須恵器	有蓋高杯	玄室	床面	13.95	8.7	12.3	34とセット	
39	須恵器	有蓋高杯	玄室	床面	13.2	19.65	14.8		
40	須恵器	有蓋高杯	玄室	床面	14.4	20.6	14.9		
41	須恵器	無蓋高杯	玄室	床面	12.6	17.25	11.6		
42	土師器	高杯	玄室	床面	12.3	13.8	10.55		
43	須恵器	無蓋高杯	玄室	床面	12.4	7.9	9.05		
44	須恵器	提瓶	玄室	床面	5.1	20.15		幅16.0	
45	須恵器	提瓶	玄門踏	埋土	5.65	19.8		幅(14.9)	
46	須恵器	提瓶	玄室	床面	(8.1)	17.3		幅13.2	
47	須恵器	提瓶	玄室	床面	6.85	15.4		幅(12.15)	
48	須恵器	蓋	玄室	床面	5.65	3.1			
49	須恵器	台付長颈瓶	便道	床面	9.1	(22.3)		腹径18.05	
50	須恵器	台付長颈瓶	玄室	床面	9.35	29.35	13.15	腹径15.8	
51	須恵器	短颈瓶	墓道	埋土	(11.1)	(5.15)			
52	須恵器	短颈瓶	墓道	埋土	(10.9)	(3.0)			
53	須恵器	短颈瓶	玄室	床面		(8.6)		腹径13.4	
54	須恵器	瓶	玄室	床面	15.4	18.2		腹径12.15	
55	須恵器	広口瓶	玄室	床面	18.1	25.1		腹径18.0	
56	須恵器	罈	玄室	床面	30.7	46.3	24.5		
57	須恵器	壺	床面外	-	(44.5)	(35.35)			
58	土師器	高杯	便道部	埋土	12.8	7.8	(10.0)		
59	土師器	高杯	便道部	埋土	(13.4)	6.6	(9.6)		
60	土師器	高杯	便道部	埋土	(11.9)	6.85	(9.9)		
61	土師器	高杯	便道部	埋土	(13.4)	(4.6)			
62	土師器	高杯	便道部	埋土	(12.8)	(3.8)			
63	土師器	高杯	便道部	埋土	(13.2)	(4.3)			
64	土師器	高杯	便道部	埋土		(4.7)	(9.0)		

写真図版



調査地遠景（東から）



調査地遠景（北から）

写真図版 2



調査地遠景（東から）



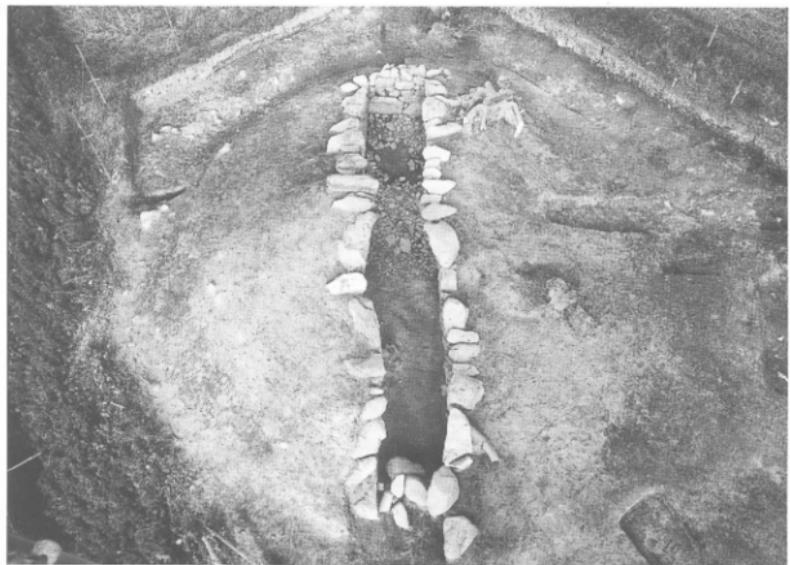
調査地遠景（南西から）



窟屋 1 号墳調査前（南から）



窟屋 1 号墳調査前（東から）



窟屋 1 号墳全景（南西から）



窟屋 1 号墳全景（北東から）



周溝（南から）

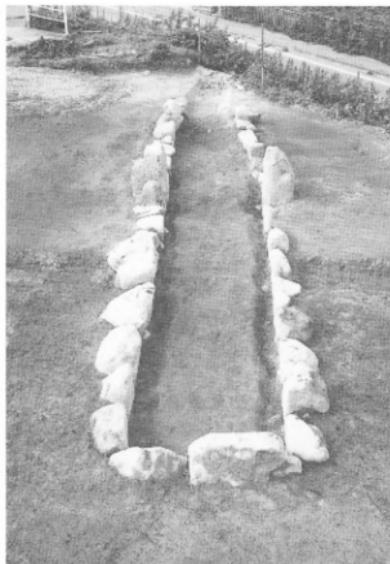


墳丘断面（南西から）

写真図版 6



石室全景（北東から）



石室墓底石（北東から）



石室掘方（北東から）



石室内（南西から）



石室右側壁（南から）



石室左側壁（南西から）



右壁玄門立柱石（南東から）



左壁玄門立柱石（北西から）



玄室左壁部分（北西から）



石室奥壁（南西から）



玄室床面（北東から）



玄室遺物出土状況（北東から）



玄室遺物出土状況（南西から）



玄室右側奥遺物出土状況



玄室左側奥遺物出土状況



玄室右側奥遺物出土状況



玄室左側奥遺物出土状況



玄室右側前遺物出土状況



玄室左側前遺物出土状況



羨道遺物出土状況



環頭大刀柄頭出土状況



1



2



2



4

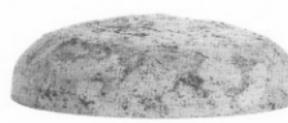
3



3



5



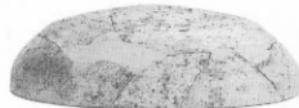
8



6



9



7



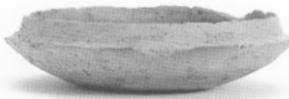
10

写真図版12

須恵器 2 杯身



11



12



13



14



18



15



19



16



20



17



21



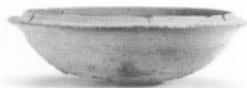
22



26



27



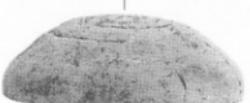
23



28



29



24



I



25



30

写真図版14

須恵器 4 有蓋高杯



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



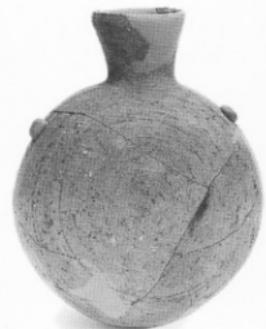
41



44



42



45



43



46

写真図版16

須恵器 6 提瓶・壺



48

47



49



50



51



52



53



54



55



56

写真図版18

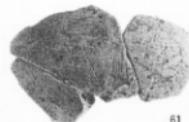
須恵器 8 壺・土師器・陶磁器



57



59



61



62



63



64



65



66



M 1



M 3



M 2

写真図版20

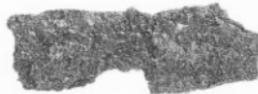
金属製品2 大刀・刀子



M 4



M 5



M 6



M 7



M 8



M9



M10



M11



M12



M13



M14



M15



M16



M17



M18



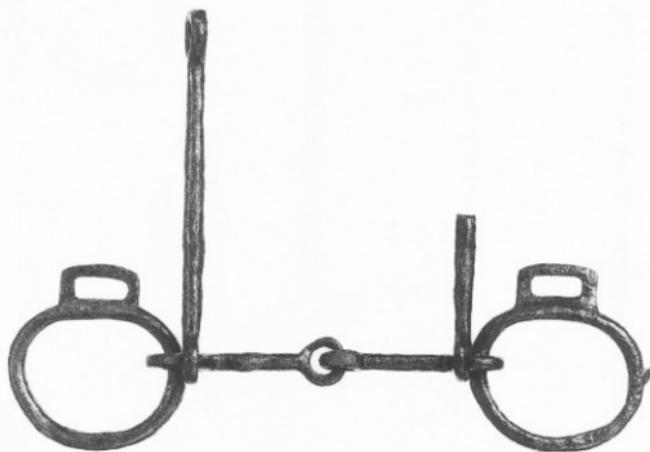
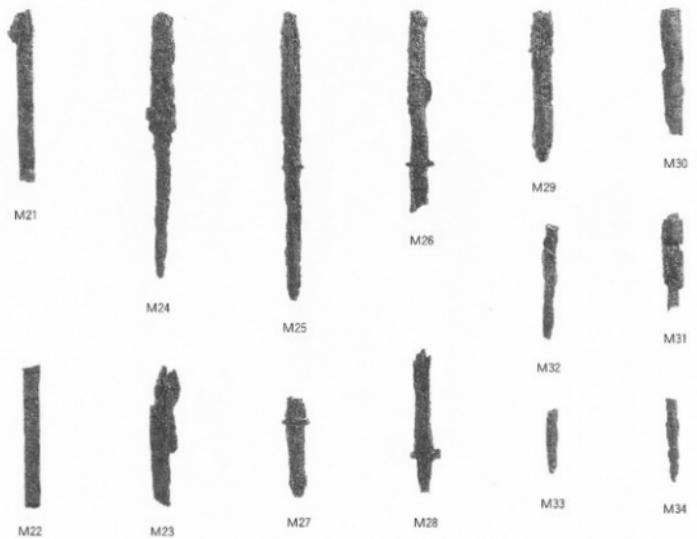
M19



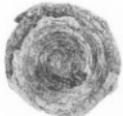
M20

写真図版22

金属製品4 鉄鎌・馬具



M35



写真図版24

金属製品 6 鉄釘・耳環など



M50



M51



M52



M53



M54



M55



M56



M57



M58



M59



M60



M61



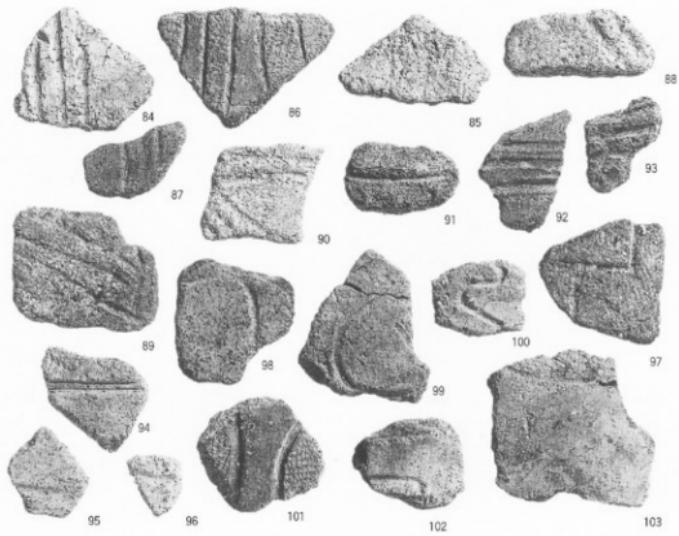
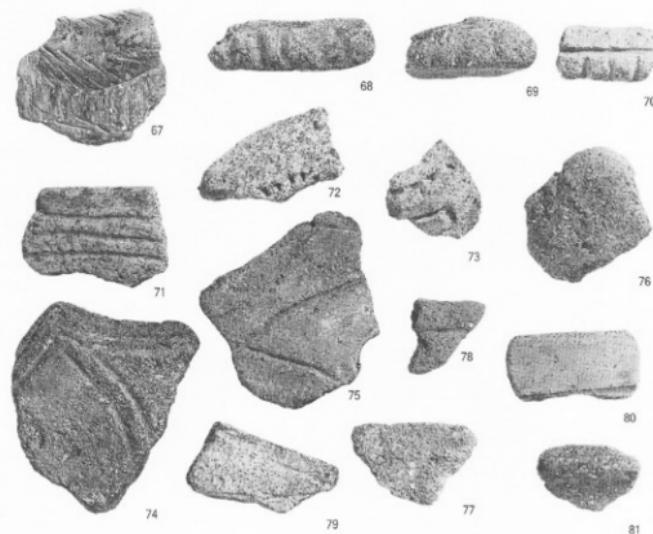
M62



M63



M64





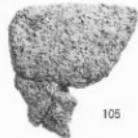
82



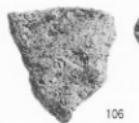
83



110



105



106



104



111



109



108



107



114



113



115



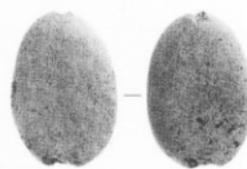
116



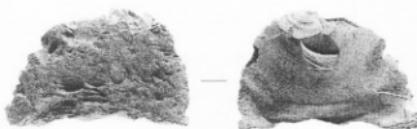
S 1



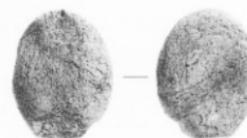
S 2



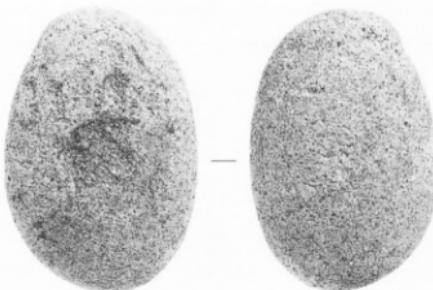
S 6



S 3



S 4



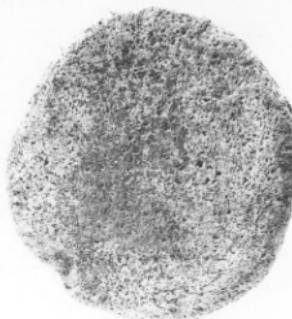
S 8



S 5



S 7



S 9

報 告 書 抄 錄

兵庫県文化財調査報告 第353冊

窟屋1号墳

(主) 平野三木線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告書

平成21年3月23日発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 加古郡播磨町大中500

TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒652-0032 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 交友印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4番5号
